

**特報**

講演・討論会 (公益財団法人 櫻山奨学財団主催の懇話会)

# 韓国の反日と日本の嫌韓

荒木 和博 氏  
あらかき かずひろ

(拓殖大学海外事情研究所教授)

# 日韓関係について

## — 伝統的国際秩序観念 —

渡辺 利夫 氏  
わたなべ としお  
(拓殖大学総長)

公益財団法人樫山奨学財団（亀岡エリ子理事長）が2014年3月18日、東京・京橋で渡辺利夫・拓殖大学総長を囲む少人数による第5回懇談会を開催しました。今回は荒木和博・拓殖大学海外事情研究所教授が「韓国の反日と日本の嫌韓」の演題で、また渡辺総長が「日韓関係について——伝統的国際秩序観念」の演題で基調報告をした後、参加者をまじえて質疑討論を行いました。いわゆる従軍慰安婦問題などで日韓関係がこれまでにないほど冷却している現在、両国関係のどこにどのような問題があるのか、歴史を振り返ったお話は現在の状況への対処法に大きな示唆を与えてくれるものでした。お二人の基調報告などを掲載致します。

**荒木 和博・拓殖大学海外事情研究所教授** 荒木でございます。現在、拓殖大学の海外事情研究所に勤務をしています。きょうお話しするのは、日韓関係を中心にと聞いておりますが、その前に私自身が本職とは別に、ボランティアで北朝鮮による拉致問題に関わっております。特定失踪者問題調査会と申します、日本政府が認定していない、拉致の可能性のある人たちについて調べる団体の代表をやっております。ちょうど、横田めぐみさんのご両親がモンゴルでお孫さんのキム・ウンギョンさんとお会いしたというニュースがありましたので、これに関してちょっとだけお

話をさせていただいて、あとは韓国の話をさせていただきたいと思います。

### 横田夫妻はめぐみさんの情報を得たのかも

**荒木氏** 結論からですが、これは全く私の推測でございますので、横田さんから聞いたわけでも何の裏を取ったわけでもございませんが、モンゴルで横田さんご夫妻は、いちばん行くところまで行っていけば、めぐみさんと会ったかもしれない。その可能性は少ないと思いますが、例えばめぐみさんと電話で話をしたとか、あるいはめぐみさんの直接のメッセージを何らかの形で受け取ったかをしているのではないかと、私は推測しております。それはいろんな理由がありますが、それは省きます。前からそういう話があったのですが、ここへ来ていろんなことが動いておりまして、その一環であろうと思います。

ただ、これはいい方向へ転ぶのか、悪い方向に転ぶのかというのはちょっとわかりませんが、こういう言い方がいいかどうかわかりませんが、今まで拉致被害者の救出運動というのは横田めぐみさんが象徴で、ある意味で言うと、横田さん頼みの運動みたいなところがございました。マスコミの追いかけるのもみんなそういうところばかりで、それ以外の方々については極めて扱いが小さい。場合によって横田さんがこれで矛先を収めるようなことがあると、運

動自体が一気に冷めてしまう。結果が出ていればいいのですけれども、実質何も進まない状態で世論が冷めてしまうことにならないかという危機感を、じつは私は非常に持つております。これから先どう動くかわかりませんが、今はかなり正念場かなと思つております。

3月5日に参議院の予算委員会でも井上義行さんという、元安倍（晋三）さんの秘書官をやつておられまして、いまはみんなの党の参議院議員で、みんなの党の拉致対策本部の委員長をやつています。この方が、拉致被害者の救出の問題について質問をいたしまして、「向こうの体制に異変が起きたときに、自衛隊が使えるのか。法整備をするべきではないか」というご質問をされました。これに対して安倍さんの答えは、要は「できない。現在の自衛隊法では、相手国の了解が要る。それが無いから自衛隊法は使えない。国際法からいえば、こういうときに相手側の了解がなくても行つても問題がないという解釈があるんだけど、我が国には憲法九条があるからそれはできません。アメリカなどに情報を出して協力を求めています」というようなこととございました。

じつは、その前の日には福島瑞穂さんの質問に応えて、これもやはり「いざとなったときに自衛隊は使えない。アメリカや韓国に協力を求める」という答弁をしています。考えようによつては、これだけで内閣がひっくり返つても

おかしくないような答弁なんです。残念ながら我が国にはこれを問題にする野党もいなければ、マスコミもいないし、何も起きていないというのが正直なところとございます。「法律があるから、できないんだ」ということで行くと、じゃ、アメリカや韓国に頼んだときに、「我が国は憲法の制約があつて自分の国の国民を助けに行けません。だから、すみませんけれどもアメリカや韓国が血を流して取り返してください」ということが言えるのかというと、言えるはずはない。もしそれを言ったとした場合に、アメリカや韓国はどう思うか。もしそれを呑むということであれば、それはつまり日本が逆に韓国やアメリカの言つていることをすべて呑むということの裏返しになるわけでありまして、いずれにしてもこれはじつは本当は大きな問題だと思ひます。

その韓国ですが、例えばもしそういう状況になつて韓国が何かをするということになつたらば、それこそいま言つている歴史問題等について、「韓国の歴史認識を全面的に認めなさい」ということになつて、それこそ東京のど真ん中に慰安婦の銅像でも立てて、「閣僚は必ずそこに謝りに行きなさい」とか、そんなことだつて冗談のように聞こえますが、まったく言えなくなつてくるわけでございます。

お手元にお配りいたしました「韓国の反日と日本の嫌韓」



「横田夫妻はモンゴルでめぐみさんの情報を得た可能性もある」と衝撃的な発言をした荒木和博・拓殖大学海外事情研究所教授(右)は朝鮮半島問題のプロフェッショナルだ(2014年3月18日、東京都中央区の樫山奨学財団会議室で)

というプリントがございます。これは、私も海外事情研究所で今年から担当することになりましたが、去年まで史料調査会という旧海軍の方々の財団法人がありまして、ここが出していた『世界軍事情勢』という年刊がございます。これを海外事情研究所で担当することになりまして、名前を『年刊 海外事情』と変えて、4月には2014年版の初めてのものが出ますが、そのなかに書いたものでございます。じつはこれはまだ再校で、ここからまた多少変わっていますのでそれをご了解の上で、後ほどでもめくっていただければと思います。

韓国の反日は、どういうものなのか。じつはきょうAさんともお昼を食べながら議論をしていたところでございますけれども、ともかく普通に考えたら病氣としか言いようがないような状態であると。この間の国際講座でしたか、渡辺利夫先生も「精神医学的に分析したほうがいいんじゃないか」というお話をされたような記憶がありますが、社会学とかそういう段階ではなく、本当に真面目な話、私は精神医学で分析してみるというのは、ひとつの手法かなと思っているぐらいでございます。どんな理屈を言ったって、全く話にならない状況が続いている。前に、盧武鉉ノムヒョンという訳のわからないオバマみたいな大統領が、あるいは菅直人みたいな大統領が韓国におりましたが(笑)、あの人は5年間の任期で、日韓の首脳会談をなんと11回やっております

す。シャトル外交というほど、あれだけ日本のことを悪口を言った人ですが、それでも11回、首脳会談をやっている。朴槿恵は、当選したからいまだに1度もやっていない。いまだに、やるか、やらないかについてはっきり明言をしていないということをごさいますして、これは極めて異常なこととであります。

皆さんおわかりのように韓国の大統領って、終わると牢屋にぶち込まれたり、自殺したりということが多い国ですが、こうなる理由のひとつは構造的なものがあって、韓国において大統領というのは王様なんですね。基本的には、言われたら誰もみんな従うしかない。しかも、その王様を国民が選ぶ。それから5年間という期限付きというのがついてまいります。これは1987年の盧泰愚ノテウが当選した大統領選挙以来、5年1期というのはずと続いております。再任はできない大統領、直接選挙で選ぶ大統領で、なおかつものすごく権限が集中している。そうするとどういうことになるかといいますと、就任した早々がいちばんリーダーシップがあつて、これが残り任期に比例してだんだん少なくなっていく。任期の最後ぐらになりますと、もう次の大統領選挙にみんな関心が行ってしまつて、本当にレームダックになる。次の大統領が当選すると、もう既にその人が大統領になったかのような状況になっていく。これをノコギリの刃のように繰り返し返してきたのが、韓国の

政治でございます。

### 最初から反日全開だった朴槿恵大統領

荒木氏 そうするとどうなるかというところ、最初は余裕がありますから、「いや、これは日韓の新しい時代で行こう」ということになる。「私は、今までみたいに日本叩きとかしません。未来指向でまいりますよ」という話になるわけですが、途中で評判が悪くなると、何か叩くネタが必要になる。アメリカはお世話になっているから、叩きにくい。中国を叩くとこわい。いちばん叩きやすいのは日本ということになります。で、日本を叩く。叩いているけれども、そのうちに任期が終わる。韓国というのはもともと1期しかできませんから、終わり頃になると、前の大統領を否定して自分が大統領になって来る。

いまの朴槿恵さんは、李明博イミンボク前大統領と同じ政党です。けれども、事実上、李明博を否定して大統領になった人です。そうすると本当だったら、李明博大統領は政権末期に竹島に上陸したり、天皇陛下のことに言及して日本人の頭を怒らせているわけですから、そこで「私は違います。これから日韓は一気に未来指向でいきましょう」というのが、パターンとしては普通のパターンなんですが、いまの大統領は逆に、最初から反日全開で行ってしまった。いま朴槿恵がいったい何を考えているかというのは、じつは韓

国人もよくわからない。単なるヒステリーじゃないかという人もいますが、ともかく王様ですから、怖くてみんな何も言えない。何か言うとすぐに切られちゃうという事で、まったくその動きがとれず、外務官僚なんかもおそらく何もものが言えないんだろうなと思いました。

そういうことを実感したのは、じつは朴槿恵ではなくて前の政権のときなんです。拉致問題の關係でジュネーブに行つたことがあります。これは、政府の行事に我々も加わつて行つたのですが、そのときにジュネーブの各国の代表部を回つて日本政府の主催でシンポジウムみたいなことをやつて、そこに各国の大使館の人に来てもらいました。韓国の大使館にも言つて、韓国の大使もそこにいて、日本側は古屋（圭司）大臣が行つていろいろ話をして、「やりますから、よろしく」ということを言つていた。ところが結局、韓国大使館から来れなかつたんです。来れなかつた理由は何かという、日本政府がつくつてゐる拉致のパンフレットのなかの地図に、竹島が日本の色になつていたら、これは、本当によく見ないとわからない。言われてみれば、そうかなというぐらいのものなんです。「そのパンフレットがこうなつてゐるから、日本のものには参加できない」ということです。じつは韓国の拉致被害者の家族も日本政府のお金で呼んで、発言をしているんですが、それでも来れない。これはどうしてかという、外務官僚でそういう

ところ、一回出た人が、後で国会か何かで追及されて首が飛んだことがあつたそうです。そういう意味もあつて、ともかく官僚は、「いま日本と關係をよくしておかなければいけない」と思う人がいたとしても、なかなかそれを表に出して語ることができないというような状況でございます。

### 韓国の憲法はファンタジーに基づく

荒木氏 日韓關係は今のまま、なかなか解ける糸がない。この理由が幾つかあります。ランダムな形ですがお話しすると、韓国の憲法第1条に、「大韓民国」といふのは、1911年にあつた3・1独立運動の精神を繼承して、4・19——李承晩政権が倒れた学生デモ——をもとにして出来ている」ということになっています。ただ、これは現実に歴史を見てみれば、ある意味でファンタジーに近いわけです。実際に、國際的に当時の大韓民国の臨時政府という、中国にあつた亡命政権が認められていたかという、別にまったく認められてもいなかった。3・1独立運動のあつたあと日本も統治の仕方を少し変えて、その後事実上、朝鮮半島のなかで本格的な独立運動のようなものはほとんど存在をしていなかった。それは、当時の朝鮮半島に駐留しておりました日本軍が、京城の南の竜山にあつた20師団と羅南にあつた19師団と二つしかなかった。あとは航空隊と

要塞部隊ぐらいですから、全部合わせたって10万人もいなかったろう。日本の本土の国土の3分の2ぐらい、22万平方<sup>キ</sup>の広さがある朝鮮半島に10万人の兵隊で間に合ってしまった。末端の警察官はほとんど朝鮮人ですし、そういう状態で間に合ったということは、要は非常に落ちついた状態であったということでありませぬ。

そういう意味でいうと、そのときに朝鮮半島の独立運動をやっていた人はある意味でマイナーだった。いまの大統領のお父さんの朴正熙大統領は、「やがて独立しなければいけない」と日本の時代から言っていたと私は聞いていますけれども、それは現実を見た上で、やはり力を持ってなければいけないんだということの前提の話であって、別に一般の人たちが独立運動でしょっちゅうゲリラをやっていたとか、そんなことでも何でもなかった。その状態で、日本が負けて解放されてしまったわけですね。自分たちの力が戦って取ったものではなくて、自分たちは日本人だと思っただけで実際戦争にも参加していません。志願兵制だったわけですからけれども、志願をすればたくさんの方が集まって来た、特攻隊志願をした人もいたというような状態で来たわけですが、ある日突然日本がいなくなっちゃった。

で、アメリカとソ連が南北からやって来るわけですが、そのときに朝鮮半島の人たちにもし選択肢があるとすれば二つしかなかった。一つは、「我々は日本国民です。だから

敗戦を受け入れませぬ」と言うか、そうでもなければ「我々はじつは戦っていたんだ。日本の統治に抵抗していたんだけれども、あまりにも日本の統治がひど過ぎて、これを絶対にひっくり返すことができなかったんだ」というような論か、どっちかしかない。これは仕方ないことと思うのですが、朝鮮半島の人たちは後者を選択をした。で、「独立万歳」ということで、一時は沸き返ったわけですが、結局自分たちの力で独立を果たしたわけではないので、その独立をさせてくれた国によってまた蹂躪されてしまうというのは、善し悪しは別として歴史としては必然的なものではないか。結局、アメリカとソ連によって分断される形で、3年間の軍政を経て独立をしたときは2つの政府ができてしまう。

ただ、そうはいっても両方も、「朝鮮半島の唯一合法政府は自分たちである」という建前はいまでも変えておりませぬので、ソウルに行って『大韓民国全図』を買っても、平壤に行って『朝鮮民主主義人民共和国全図』を買っても、まったく同じ朝鮮半島の地図が売られて、受け取ることができます。私は両方も持っていますけれども、そういう状態が続いてきているわけですが、ともかく自分たちで独立を勝ち取ったのではない。そしてまた、日本の時代にある程度落ちついた状況があったことを認められないということになると、その歴史をファンタジーでつくっていく

しか方法がなくなってしまう。それが、独立運動なんかを過大に評価をすることにつながる。

それでも、日本の時代を知っていた人たちがいた頃は、そうじゃないということがわかっていた。自分たちも結構楽しい思い出もあったし、70年代ぐらいまでは「日本の時代のほうが暮らしよかったよ」とか、あるいはその当時のことを懐かしんでいる人たちも、決して少なくはなかった。北朝鮮では、まだ今でも「日本の時代のほうがよかった」と言っている人はいるそうですけれども、韓国でも70年代ぐらいまでは、普通にお年寄りなんかと話をすれば聞けました。

ということでしたが、それが時代に変わってくることによって逆の方向に進んでしまった。私たち朝鮮屋の多くは、韓国が1986年にアジア大会、88年にソウルオリンピックということが進んできて経済が非常に発展して来ていたのを見て、「あ、これでもうなんとかなる。今まで日本はけしからんとかいろいろなことを言われてきたけれども、もう余裕ができれば言わなくなるだろう」と思ったんですね。だから、あんまりよいけいなことは言わないで黙っておこうと。向こうが多少無理なことを言ってもおとなしくしておこうとしていたのがじつは間違いで、その当時の経験のない人間が増えてくると、どんなファンタジーであつてもまともに受け入れてしまう。

80年代ぐらいに確か従軍慰安婦のテレビドラマとかあったと思うんですが、向こうは実録ドラマみたいなものが結構多くて、そのドラマも実際には史実とかなりかけ離れた部分のものがあるんですが、そういうものを結構、本当の話みたいにして受け止めてしまう。日本の時代に、お花畑で花を摘んでいたうら若い乙女を、突然日本の憲兵がトラックに乗ってやって来て、銃剣で脅してつきつけて、トラックに乗せてどこかに連れて行って、そこでレイプをして、売り飛ばして戦地の慰安所に送ったという話が、それは実際にあり得るのかということじゃなくて、「あるはずだ」というふうな話がすつ飛んでしまう。

### 「これが最後」と次々嘘を認めさせる韓国

荒木氏 日本のほうでは、「そんなこと幾ら言っているも嘘なんだから、やがて嘘は明らかになって、もう誰も言わなくなるだろう」と思ってた。ある意味で、この辺はそういうものの産物で、「ここで認めてくれれば、もう言いませんから」と韓国政府のほうは言ったわけですが、結局それを言ってもさらに逆に蒸し返されるネタに使われるだけであつたということなんだろうと思います。ですからこのままで行くと、これから先もおそらく同じことが繰り返されるのではないだろうか。だから、いくら話し合いをしてとか、理屈でちゃんとその事実関係を明らかにしてと

かいうような話をしたところで、韓国の中で、そこで折り合いがつくということは私は80%あり得ないだろうと思っております。

じゃ、いったいどうすればいいのかということですが、これは結局、日本が強くなるしか方法はない。これは儒教の影響なのかわかりませんが、韓国の人は上か下かの上下関係でものをとらえる。大学というと、いちばんトップにソウル大学があつて、それから延世大学とか高麗大学とかすごい序列があつて、上なのか下なのかというのをすごく気にします。先月、韓国に行ったときも警察官と話をしていて、「日本は、韓国を東南アジアの国と同じに見ているのか、下に見ているのか、上に見ているのか」とか言われて(笑)、「いや、日本はそういう上とか下という感覚はないんだけど」という話をしたら、非常に不満そうな顔をしておりました。順番、序列をつけたがる。序列が自分より上だったら、すごく偉そうにしていけないと落ちつかない。下だったらこつちが偉そうにする。

最近あんまりないと思うんですが、昔、よく韓国の街中で喧嘩していて、途中で「おまえは何歳だ」と年を聞いて、年の上のほうが勝ちというようなことがございました。そういう感覚は、いまでもあるんですね。そうすると、日本人というのは強いはずなんだけれども、すごい下手に出るというか非常に低姿勢だと。これが、すごく落ちつかない

部分がある。「偉いんだつたら偉そうにしてくれ」というところがあるんですが、日本人の感覚からすると、それがなかなかできないということがございます。

あと、なかなか話が合わなくなる理由のひとつが、この間の李明博大統領のときにもいちばんはつきりしていましたが、韓国の人は堪忍袋という感覚がないんですね。日本人は、いろんなことを言われても堪忍袋にためて、最後の最後になったら爆発をするというパターンが様々ありますが、この堪忍袋がないから聞いたたらずぐ反応しちゃう。これは私、よくたとえ話で出しますが、韓国で韓国風の『忠臣蔵』をやつたらどうなるか。赤穂浪士は吉良上野介の家の前に浅野内匠頭の銅像を建てて、毎週一回そこに行つて、「吉良上野介を打倒するぞーッ」というシュプレヒコール、集会をやつて、そのあと各藩に散つて、「吉良上野介は、こんなに悪いやつなんですよ」というのを言つて回るといふことなんじゃないだろうか(笑)。日本的な高倉健さんの昔の東映のやくざ映画みたいに、いじめられて、いじめられて、虐げられて、最後になつて相手の組の親分のところに斬りつけに行くという、あの発想が全然ないんですね。だから韓国人からすると、「日本人は何にも言わない。何も言わないんだから、自分たちの言っていることを認めているんだろう」と思っちゃう。そう思っていたらば竹島上陸で、ある意味日本のなかで爆発しちゃった。だから、

荒木 和博（あらかき・かずひろ）氏 拓殖大学海外事情研究所教授、特定失踪者問題調査会代表。1956年東京都生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒、民社党本部書記局に入局し、教育・広報・青年運動などを担当。93年、第40回衆院総選挙に旧東京7区から無所属で立候補、落選。94年、民社党解党に伴って退職。現代コリア研究所で研究部長。96年、拓殖大学海外事情研究所客員講師。助教授を経て2004年10月より教授。主な著書に『愛し哀しき韓国よ!』（亜紀書房）、『拉致 異常な国家の本質』（勉誠出版）、『内なる敵をのりこえて、戦う日本へ』（草思社、『日本が拉致問題を解決できない本当の理由』（同）、『なぜ北朝鮮は崩壊しなかったのか 日本の鏡としての北朝鮮』（光人社）、『山本美保さん失踪事件の謎を追う 拉致問題の闇』（草思社）など。

渡辺 利夫（わたなべ・としお）氏 拓殖大学総長。1939年6月甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。外務省国際協力有識者会議議長。第17期日本学術会議会員。アジア政経学会理事長（元）。山梨総研理事長。JICA国際協力功労賞。外務大臣表彰。正論大賞。『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞）、『開発経済学』（大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（アジア太平洋賞大賞）、『神経症の時代』（開高健賞正賞）、『新脱亜論』（文春新書）、『アジアを救った近代日本史講義—戦前のグローバリズムと拓殖大学』（PHP新書）など。

韓国人はまったくわからないんです。「なんで日本人は怒っているんだ。今までと同じことをやっているだけじゃないか。それなのに何で怒るんだ」と。これはきつと、「安倍政権は極右だから、すごく特別なことがあるんじゃないだろうか」と思っているのではないだろうかという感じがします。このあいだ8月の終わりにソウルに行ったときも、韓国人と話しても誰もわかってなかったですし、この2月もソウルに行って見ても、そういう感覚は全然ない。

韓国にしょっちゅう行かれてる方はおわかりかもしれませんが、あんまり行かれてないかもわからないかもしれません。このあいだ2月に韓国に行ったときにすごく印象に残ったのは、街中に日本語の看板が結構増えていました。居酒屋とか、そういうものです。昔は、日本語の看板というのはほとんど見たことがありません。日本料理屋とか、日本人の観光客がたくさん来るようなところにはありましたけれども、普通の街中にはなかったんですが、このあいだ行ったときにはチェーン店のレストランで、平仮名で「もりもり」と書いてあったのが泊まったホテルのすぐ近くにあって、それは別に日本人の観光客相手ということではなくて、向こうの人が普通に食べに行くレストランです。炬端焼きとか、寿司はもちろんです。非常によくあって、それが全然違和感がない。

日本のなかで見ていると、大統領があつた調子ですから韓国人はみんな反日で煮えたぎって、日本人と見るとただちに殴りかかるんじゃないかとまで感じられますが、向こうに行くのと拍子抜けするほどそういうことがない。韓国で反日デモなんていうのは、ほとんど大使館の前でやるだけですね。しかも、あれもおそらくマスコミが来なかつたらみんなやらなくなっちゃうと思います。あそこに来れば反日デモをやっているだろうと思って、マスコミが来てみんな撮ってくれるということとやる部分があつて、一般の人たちはそういう意味での感覚がないんですけれども、じゃあ、あの国は反日じゃないかという、やっぱり大統領を初めとして政府の言っていること、あるいはマスコミはもつとひどいですけども反日ということについては、そこは出ている。

この部分の乖離がものすごくあつて、しかも一人の人間のなかでも乖離していたりしますから、いったいどうすればいいのかというのは私もまだ結論が出ていないんですけれども、そういう状態である。論議でどうこう言っているわけではない。だから韓国人からすると、日本人が怒っているのがまた全然わからない。我々は感情表現をすることにありますから、そうすると向こう側はわからない。だから冗談で言っているんですけども、慰安婦の銅像に向けて、

日本大使館の壁のところにプラズマ・ディスプレイで東映のやくざ映画か何かをずっと上映しておいて、「日本人は、最後に何をやるかわからねえんだ」ということを見せておいたほうがいいんじゃないかなと思うぐらいでございます(笑)。

でも私は朝鮮屋ですから、朝鮮半島を嫌いでやっているわけではなくて、韓国の人って愛すべきところもあります。個人的につきあえばいい人たちも多いので、どうにかしたいと思うんですけども、なかなかそれを変えることができない。できるというのは、やはり渡辺先生がよく、「韓国もアメリカも変えることはできないけど、変えられるのは日本だけだ」とおっしゃっています。本当に日本が堂々と言うべきことを言って、これは軍事的な意味も含めてですが「強い」という感覚になったときに、韓国のなかで見方はおそらく劇的に変わるのではないだろうかという感じがいたします。

これは地政学的な状況で仕方ないのですが、朝鮮半島というのは中国とロシアと日本に囲まれていて、周りがみんな大国ですから、イタリアみたいな地中海に突き出しているとは海だというのならいいんですけれども、海に行こうと思うと日本が邪魔しているという状態で、隣には中国がいてものすごい圧力をかけてくる。ですから、強いところは何とかしてくつついてないと生きていけないというも

のがあったわけで、逆にいえばそのなかで国をずっと維持してきたということは、これはまたこれですごいことだと思ふんですね。そのためには、そういうテクニクは使わざるを得なかったということではないだろうかと思ひます。

### 日本が強ければ日本になびくような国

荒木氏 それはつまり、日本が強くなれば日本について行く。おそらく、ある何かがあったことよって、今まで反日で騒いでいたような人が突然、「いや、もともと同じ国じゃないですか」と言い始めるといふことだつて、私は十分にあるんじゃないかなという感じがいたしております。一時期、中国の影響力がものすごく強くなつて来たときに、私も韓国の人から、「いま日本と一緒に手を結ぶべきだ。そうしないと、中国に呑み込まれてしまう」といふようなことを聞いたことがあるんですね。この言い方は最近、完全にこつち（中国）に行つちやつたものでなくなつていますが、やはり中国とのカウンターという意味で、日本との関係を強くしたいといふことは、今後の状況によつては出てくる可能性はあると思ひます。

これは、じつは北朝鮮も非常によく似ていまして、いま北朝鮮のなかで中国といふのは生命維持装置みたいなものです。中国の援助がなかったら、北朝鮮の体制なんか一日

で倒れてしまふ。ですけれども、北朝鮮の人たちは中国を大嫌いです。テノム——テというのは垢、ノムというのは野郎、つまり「垢野郎」という意味ですけれども、中国人の別称なんです、こういうことを結構平気で言ひますし、基本的には嫌いだと。このあいだ東京に来ていた元北朝鮮の安全部（警察）にいた脱北者の人に、「いま北朝鮮の上のほうの人間は、中国をどう思つてゐるのか」と聞いたら、「ともかく中国のやつらは、我が国の資源を持つて行くだけだといふ認識だ。非常に憎しみを持つてゐる」と答へました。そこまで言うかと思つたんですけれども、そういうものを持つてゐた。

といふことはつまり何かといふと、逆に手を結びたいのはアメリカとか、日本といふことになるわけですね。実際、2000年6月に南北の首脳会談がございました。金正日キムジョンイルと金大中キムジョンフンで首脳会談をやりましたが、あのときに非常に象徴的なことがございまして、2000年6月に南北の首脳会談があつて、それから南北関係が急展開をし始める。例えば韓国からマスコミの社長さんたちが大挙して押しかけるとか、いろんなデリゲーションが北朝鮮に行く。そこで金正日も会つたりするわけですが、じつはあのときに金正日がいちばんやりたかつたのは、韓国との関係がよくなつたといふことを出汁にして米朝関係の打開をしたかつた。

## 金正日に面子をつぶされた中国

荒木氏 あの年の10月にオルブライト米國務長官が、アメリカの現職國務長官として初めて平壤を訪問するわけですから、じつはその直前に中国の遲浩田という国防大臣が平壤に入っておりまして。何故かという、2000年というのは1950年の朝鮮戦争が始まってちょうど50周年で、10月というのは中国軍が介入して50周年だったそうです。それで入っていた。その後からオルブライトがやって来た。金正日はどうしたかという、遲浩田に会わないでオルブライトと2日間ずつとべったり一緒にいて、そしてオルブライトが帰ってから遲浩田に会うということになった。

中国からすると、「朝鮮戦争のときに助けてやったのは、自分の国だろう。オルブライトというのは戦ったアメリカ帝国主義の外務大臣じゃないか。ここまで面子を潰すか」という、ものすごい怒りが当然あったわけです。中国人にとって、いちばん嫌な面子を潰すことをやっちゃったわけですね。このときも金正日の頭のなかは、「これでアメリカとやれる。アメリカと手を結べば、中国の連中はうるさいことを言えない」と思っていたと。そうしたら、その後の大統領選挙で共和党が勝って、さらにその翌年に9・11が起きてアメリカはどんどん強硬になる。中国はもう怒っ

て相手にしてくれない。アメリカとの間も悪くなる。しようがないから日本に接近した結果が、2002年の9・17の小泉訪朝で、絶対に認めたくなかった拉致を認めるといふところまで行ったのは、そういうことだったのだろうと思います。

このパターンは、韓国と北朝鮮は同じ民族ですから非常によく似ておりまして、いま韓国は同じようなことを、中国とアメリカをひっくり返したような形で起こしてしまっている。これで、アメリカはだんだん嫌いになって来ていて、日本との間もまた悪くなっているということ、今後どういうふうになっていくのかは、いろんな要件がありまますから簡単に「こうなります」ということは言えないんですけれども、そういう状況ではないだろうかと思えます。この地域は、例えばオーストラリアとニュージーランドみたいな2つの国しかなければ1本の線で済むのですが、日・米・中・露に南北朝鮮と六つ加えますと、線が15本ですか、引かれる。ものすごく複雑な状況である意味で言う、朝鮮半島という碁盤に、当事者を入れれば周りから6人のプレイヤーがみんな勝手に石を置いているような状況なので、例えば今度のめぐみさんの話だって、いまは一応日朝だけの話ですけれども、これに今度アメリカや韓国が絡んでくると何がどうなるかわからないという状況でございます。

話があちこち行つて申しわけありませんが、そういう状況のなかで韓国は、いま経済的にもあまりよろしくない。

これは鈴置さんが専門なので、私が偉そうなことは何も言えません。政治的にもいまの朴権恵政権はかなりの無理が来ている。朴権恵自身が周りの言うことをまったく聞こうとしていないということで、まだ就任1年しかたつてなくて残り4年間あるのですが、今後どういうふうに進んでいくかまったく不透明です。

朴権恵さんが当選した理由のかなり大きな部分は、投票のかなりのところは高齢者の投票。若い人たちは野党の文在寅に入れていて、年配の人が朴権恵に入れたと。年配の人が入れた理由は、ひとつにはお父さんのイメージがものすごく強くて、貧しかった韓国を中進国にひっぱり上げてくれたリーダーというイメージが、年配の人にはものすごく支持が強くなっているんですが、しかし朴権恵は、そのお父さんのお蔭で親日派だということと叩かれてきた。だから、いまやっている反日もその逆張りみたいなものがおそらくあるのだと思いますが、これを変ええることは非常に難しいだろう。もし北朝鮮が戦争でも起こせば、「もう、これは日本の助けを借りなきゃいけない」ということになるでしょうから、そのときはなりふり構わずやることになるかもしれませんが、その可能性も少ないということになれば、残念ながら日韓の関係はこの状態が当分続く可

能性はあるだろう。

## 韓国の反日は頭の中の妄想

荒木氏 ただ、韓国のなかで言われている「反日」というのは、逆に事実関係に基づいている反日ではありませんから、ファンタジーみたいに頭のなかで妄想みたいにして出来てきている反日なので、そういう意味では逆にこちら側から、もし何らかのプロパガンダの戦略があれば結構簡単にひっくり返せるのではないかな、という感じもじつはしております。ただ、それをいったいどういうふうにしていいのかということ、私はまだわからないので、いろいろ考えている途中なんですけれども、日韓関係はまだしばらくこういう状態が続くのではないだろうかと思つていて次第でございます。

すみません、まとまらない話で申しわけないのですが、思いつくままにお話をさせていただきましたので、また後ほど議論ができればと思います。とりあえずお話を終わらせていただきます（拍手）。

渡辺 利夫・拓殖大学総長 荒木さんのお話、大変説得的で反論することは何もありません。同意できることがほとんどだったような感じがいたします。

韓国というのは、病理学の対象なんですよ。神経症

シンドローム国家だと言うことができるかもしれませんが。急に神経症になったわけではなく、長い伝統があつてそうになったらうと思えますね。きょうは朝鮮の伝統的な観念についてお話してみたいと思います。できるだけ韓国人でもなく、日本人でもなく、第三国の人間が朝鮮あるいは日朝関係をどう見てきたか。私の本棚にあるいろいろな朝鮮に関する著作を引つ張り出してウンと思えるようなところを、きょうは収集してやって来ました。レジユメが資料集みたいになっているのはそのためです。私の心に響いた文章がどんなものかを知っていたくことになるうかとも存じます。

前回、この懇談会で東アジアシステムとしての古来の華夷秩序（かいちうじよ）、清朝時代になってより顕著になった冊封体制（さくほうたいせい）の話をしました。おさらいですが、レジユメの初めに書いてありますが、華夷秩序とは「中華を中心として同心円的に広がり、周縁に位置する人種や民族ほど文明度が低いとみなす古来の価値観念」です。これ以上簡単化できない定義ですね。もうひとつ、冊封体制とは、「中華の礼式に服させ、見返りに王位を与えてその王に領土と領民の統治を委ねる伝統的な国際秩序観念」というのが私の定義でした。こういう観念を前提に考えれば、1992年の領海法の成立とか、あるいは最近の防空識別圏の一方的な設定なども理解できるのではないかな、とも前回は申しあげました。

## 迎恩門を通る中国使節に9回の叩頭

渡辺氏 さて、今回は朝鮮に固有な文化的伝統のことを考えてみたいと思います。キーワードの第一は、清朝君臣関係。朝鮮思想史のほうでは清韓宗属関係という表現をしておりますけれども、隣の中国が君主で自分はその臣下だとみなす観念です。朝鮮は清朝とは君臣の関係、服属の関係を長らく紡いで来たのです。いま荒木さんのお話にありましたように、朝鮮半島というのは地政学的に見ると大変な国ですよ。巨大な中国、ロシアが北方にあり、南のほうには日本列島がワシの翼のように広がっていて、「鬱屈の地政学」と言っているような構図です。とりわけ中国は、朝鮮にとって決定的に大きく重要な存在でした。

李氏朝鮮が生まれたときは、隣の中国は明王朝でした。この明王朝に、李朝が独立した王朝であることを認めてもらわなければ困るわけですが、そう簡単じゃない。そこでとられたイデオロギーが、事大主義（大に事（つか）える思想）です。李氏朝鮮の開祖が李成桂（イソンゲ）であったことはご承知のとおりですけれども、氏は「小を以て大に事ふるは保国（国を保んずる）の道也」という表現をしたそうです。徹底的に明の懐に入り込んで、忠義を尽くす。例えば、朝鮮王の王位、「朝鮮」という国号は、明国によって認めてもらう。認められないと王位も国号もつけることができない

(公) 檜山奨学財団レクチャーレジュメ

拓殖大学総長 渡辺利夫  
日時：2014・03・18 (火)

## 日韓関係について－伝統的国際秩序観念

### ■ 東アジアシステムとしての華夷秩序・冊封体制

華夷秩序：中華を中心として同心円的に広がり、周縁に位置する人種や民族ほど文明が低いとみなす古来の価値観。

冊封体制：中華の礼式に服させ、見返りに王位を与えてその王に領土と領民の統治を委ねる伝統的な国際秩序観念。

領海法成立 1992年2月。東シナ海防空識別圏 2013年11月。

### ■ 清朝君臣関係（「清韓宗属関係」）

事大主義：李氏朝鮮の開祖・李成桂「小を以て大に事ふるは保国の道也」

明国による、王位、国号（「朝鮮」）の承認。慰問使、慶弔使の派遣。中国使者の受け入れ。「迎恩門」「三跪九叩頭之礼」。

シャルル・ダレの描写（1874年の著書）

「朝鮮国王は、新しく交替するたびに、特使を遣わして皇帝にその即位の承認を求めねばならない。特使はまた、王家に関する事、朝鮮で発生した主要事件について、すべて報告しなければならない。反対に、ほとんどの中国人使節が宮廷での品階では朝鮮国王より上位にいるために、朝鮮国王は、使節を迎えるときはソウル城外に出てつつしんで敬礼しなければならないし、そのうえ、使節が入城した門以外の別の門を通過してソウル城内に入らなければならない。……また朝鮮の特使は、国境をこえて最初の中国側都市である迎門城門を通過する資格がないので、仕方なく迂回しなければならない。朝鮮国王は、皇帝の使用する色彩は使えず、皇帝の冠に類似したものをかぶることさえ禁じられている。あるゆる民間の文書は皇帝年号の日付で表さねばならず、また重大事件が起こったときは、事態によって国王は祝賀か弔慰特使（慶弔使）を遣わさねばならない」シャルル・ダレ『朝鮮事情』金容権訳、東洋文庫 367、平凡社、1979年。

### ■ 事大主義にもとづく朝鮮社会の再編

儒教（朱子学）による社会秩序の再編。中華以上に中華たらんとする徹底的な再編成。原理主義的再編。中華への鬱屈した劣等感（コンプレックス）の表れか。

古田博司の指摘。

「コンプレックスを解消するため朝鮮民族が選んだのは道は、……中華の礼教を激しくも暴力的に教化し、実践する道であった。『朱子家礼』そのままに葬礼、喪礼、祭祀などを実践し、そして族譜をつくり、宗族を固め、再婚女を拷問し、不葬者を斬

一掃し、しばしば呵責なく処刑したり追放したりするのであった。それは、田園ののんびりした四季のリズムとなんら関係のないものであった。……王朝は平静を装いながらも、興奮と論争に明け暮れたのであった」『朝鮮の政治社会』鈴木沙雄・大塚喬重訳、サイマル出版会、1973年。

#### ■ 朝鮮に対する日本の指導者の認識

福澤諭吉（1885年の言説）

「文明の変遷、日に急にして、其東洋に向うの氣勢、復た前年の比に非ざること明に見るべし。この急変劇動の衝に当りて、内の腐敗は既に極度に達したる朝鮮国が、尚その独立を維持せんとするか、我輩の如きは到底その説を得ざる者なり」『時事新報』1985年8月15日付掲載予定。自筆草稿。日付なし。

陸奥宗光（1895年の言説）

「朝鮮半島は常に朋党争鬪、内訌暴動の淵叢にして事變のしばしば起るは、全くその独立国たるの責守を全うするの要素において欠くるあるに由ると確信せり。……今日彼の国における如き惨状を袖手傍観しこれを匡救するの謀を施さざるは隣邦の友誼に戻るのみならず、実に我が国自衛の道においても相戻るあるの誦りを免れざるに依り、日本政府は朝鮮国に安寧静謐を求むるの計画を担当するにおいて毫も遲疑する所なかるべし」『蹇蹇録』（中塚明校注、岩波書店、2005年）

#### ■ 典型的な二極社会

統治主体として存在したのは専制君主を支える両班のみ。両班、平民（中人、常民、賤民）。商人卑賤視、商業抑圧。近代化と経済近代化を担う中間層の決定的欠落。典型的な二元社会。二極社会。

再び、ヘンダーソンの指摘。

「西洋的な意味では、朝鮮（少なくとも朝鮮南部）には、中産階級というものは存在しなかった。共通の利害を持った広範かつ人口稠密な機能的集団、あるいは、地位集団が、両班と平民の間に確立されたことはなかった。朝鮮社会は、基本的に、あらゆる権利を持つ支配層とあらゆる義務を背負わされた被支配層との二極社会であった。独自の文化と商売という価値基準を持つ有力な中産階級という西欧、および日本における概念は、朝鮮には無関係であった」

その中での官僚の腐敗・汚職の横行。呵責なき搾取、収奪。

イザベラ・バードの描写。（1889年から1897年の観察）

「朝鮮国内は全土が官僚主義に色濃く染まっている。官僚主義の悪弊がおびただしくはびこっているばかりでなく、政府の機構全体が悪習そのもの、底もなければなぐさもない腐敗の海、略奪の機関で、あらゆる勤勉の芽という芽をつぶしてしまう。職位や賞罰は商品同様に売買され、政府が急速に衰退しても、被支配層を食いものにする権利

り殺し、喪に服さぬ者を百叩きにして、中国に胸を張って『東方礼儀之國』を自称したのである」古田博司『朝鮮民族を読み解く』ちくま学芸文庫、2005年。

「朱子家礼」：朱子学にもとづく冠婚葬祭マニュアル：通礼、冠礼（成人式）、昏礼（結婚式）、喪礼、祭礼（祭祀）Ⅱ礼教：儒教的思考、礼式。礼式を懸命に守ることによってのみ、人間社会はまっとうする。人間は礼教をもって教化されて初めて人間たりうる。“あるがままの人間”は存在しない。儒教的家礼のきわだった重要性。儒教への極端な崇敬。中華への著しい傾斜。

### ■ 宗族と「党争」

儒教社会における基本的な人間関係組織としての宗族（男子単系血族集団、父系性血縁集団）。本家中国より一段と厳格な宗族社会の形成。祖先発祥の地（本貫）を同じうする血縁集団の凝集力強化。宗族の相互が連合して少数の社会集団を形成することはない。宗族中心の「パッチワーク」社会そのままに、日本による韓国併合。

宗族相互に存在したのは、有力宗族間の熾烈な権力闘争。専制君主を支える文治官僚（両班）の地位を得んとする宗族間の抗争。朱子学の原典に依拠した形而上学的な体面を保ったイデオロギー闘争。実質は宗族党派間の熾烈な権力闘争。「党争」。党派の利害を超えて、異なる社会集団を統合するナショナリズムは、韓国併合時まで存在しなかった。

宗族>国家。李朝時代にもし民族なり国家なりの観念があったとしても、血族の外延的拡大を想定した擬似的血族国家か。ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」（“国民という社会的、政治的実体があるのではなくイメージとして心に描かれた何か”）か？吉本隆明の「共同幻想論」（近代国家が宗教性の強い古代・中世的な政治体制たる天皇制へと変じた怪異性への吉本流の解釈）か？

「党争」について、再び、シャルル・ダレの描写。

「貴族たちは、いくつかの派閥に分かれ、互いに執拗な憎悪をぶつけ合っている。しかし、彼らの党派は、なんら政治的、行政的原理を異にするものではなく、ただ尊厳とか、職務上の影響力のみを言い争っている大義名分だけのものである。朝鮮における最近三世紀の期間は、ただ貴族層の血なまぐさい不毛の争いの単調な歴史にしかすぎなかった……すべての貴族は、それら党派の一つに必ず属し、ただ高位高官を独占し敵対派の接近を排除することだけに腐心する。このことから、永続的な不和と争いが生じるようになった。これらの争いは、多くの場合、敗北した党派の指導者の抹殺を期して終焉する」

グレゴリー・ヘンダーソンの描写。

「李朝の政府とは、人びとを急速にそのなかにまき込んでしまう巨大な渦巻きであって、瞬時にして彼らを野心の絶頂近くに押し上げるかと思えば、次の瞬間には彼らを

か。朝鮮総督府庁舎解体（1995年）。

<sup>リョングン</sup>  
李榮薫教授の指摘。

「日本が朝鮮を植民地として支配した基本的な目的は、いわゆる“永久併合”でした。日本が残した政治史史料を見れば、“永久併合”という言葉がしつこいくらいしばしば出てきます。つまりは永久に日本の領土とみなすということです。日本人は朝鮮に二、三十年間暮らして、そのあとは日本へ帰ろうと思って来たものではありません。永久に住みつこうとしてやって来ました。この点をありのままに凝視する必要があります。“永久併合”というある意味で雄大な目的を達成するにはどうすればいいのでしょうか。まずは朝鮮の精神文化をそのままに残しておいてはダメです。そのような目的から、日本は自分の法と制度と文化を朝鮮に移植しようとしてしました。単に収奪にのみ狂奔して民心を失うよりも、このようなより根本的なプロジェクトにこだわったのが、日本による朝鮮支配の三十五年でした」永島広紀訳『大韓民国の物語－韓国の「国史」教科書を書き換えよ』文藝春秋、2009年。

#### ■ 対日協力者の問題－「一進会」について

<sup>キンフンソプ</sup>  
金完燮の指摘。

「日本と合併することだけが朝鮮の文明開化と近代化を達成する唯一かつ最善の方策であるという点については、当時朝鮮の改革勢力のあいだで暗黙の合意があったものと思われる。強力な世論に後押しされ、日本は合法的な手続きをふんで大韓帝国の統治権を接収したのである。/そのもっとも有力な証拠が一九〇四年に結成された『一進会』だ。この団体は、東学と独立連合、万民共同会など朝鮮のあらゆる革命団体が連合したものであり、朝鮮王朝と反動勢力を転覆させ、日本との連帯のもとで革命の課題である文明開化をなしとげるために結成された。……一進会は二〇世紀初頭、朝鮮革命のためにあらゆる革命勢力が連合して結成された朝鮮史上最大の政治組織であり数十万革命家の結社である」『親日派のための弁明』扶桑社、2004年。

#### ■ 建国アイデンティティの欠如

親北勢力と反日の親和性。

だけは存続するのである」時岡敬子訳『朝鮮紀行－英国婦人の見た李朝末期』講談社学術文庫、1998年。

#### ■ 小中華主義

中華世界を構成する一部、もしくはみずからを中華世界の正統の後継者とする意識の形成。

明朝が、朝鮮にとって夷族たる満族（女真族）によって滅亡。漢族による同化を経て成立した満清連合政権の清朝成立。表面的には清国に「事大」しながらも（小国意識）、民族心理の深層においては中華の伝統を正統的に後継するものは朝鮮のみでありとする「小中華主義」が芽生え、次第に強化。「衛正斥邪」「大明国之東屏」としての朝鮮という意識の増長。

現実の国際関係においては清に服属、その儀礼を守りながらこの「事大」する一方、内面においては清朝を軽侮する生き方を選択。「交隣」。「事大」と「交隣」の交錯する鬱屈した心理。表層と内面の分離、葛藤。現実と思想との亀裂。圧倒的なイデオロギー社会。イデオロギーのみで生存しえた王朝としての朝鮮。「神経症的国家」か？はたまた「阿Q正伝的国家」（「精神勝利法」）か？

#### ■ 日本統治への両班階層の反撥

小中華主義の朝鮮（上国）が蛮夷の日本（下位国）によって併合されたという、両班階層を中心とした“日本許し難し”の認識。「過去史清算」という問題の立て方。

過去を受容することのできない韓国。罪千歳に及ぶとの、現代に継承されている指導者の観念。「日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法」(2004年3月国会通過、「日本帝国主義の殖民政策に協力し、我が民族を弾圧した反民族行為者が、当時蓄財した財産を国家の所有とすることにより、正義を具現する”)。大法院判決「元慰安婦の個人請求権放棄は違憲である」(2011年8月)。ソウル高等法院判決「新日鐵住金の元徴用工に対する賠償金支払い」(2013年7月)釜山高等法院判決「三菱重工元徴用工に対する賠償金支払い」(2013年7月)の背後にある思考回路。

再々、シャルル・ダレの描写。

「朝鮮では、父親の仇を討たなかったならば、父子関係が否認され、その子は私生児となり、姓を名乗る権利さえもなくなってしまふ。子のこのような不孝は、祖先崇拜だけで成り立っているこの国の宗教の根本を侵すことになる。たとえ父が合法的に殺されたとしても、父の仇あるいはその子を、父と同じ境遇に陥れなければならない。父が暗殺された場合も、同じ行為が求められる。この場合、犯人はたいてい無罪とされる。なぜなら、この国の宗教的国民的感情が彼に与<sup>く</sup>するからである」

#### ■ 文明開化を求めた日本

現実には、日本統治があつて初めて朝鮮の「文明開化」の初期条件（物的・制度的インフラ）の整備。実証研究の面では動かし難いこの現実。であるがゆえの「過去史清算」



渡辺利夫氏（左）は中国中心の伝統的国際秩序観念を長く身につけてきた朝鮮半島の人々は今も国際社会を見るときに、その遺伝子に左右されることがある、という歴史の検討から分かった事実を第三国の人が書いた朝鮮論で検証した（2014年3月18日、東京都中央区の櫻山奨学財団会議室で）

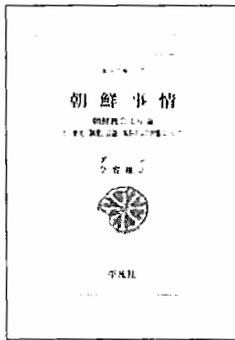
ということでもありません。国号について言えば、朝鮮ともうひとつあったらしいのですが、「このうち、どっちかを選んでください」と明国に選択をお願いしたのだそうです。ご機嫌伺いにもちよいちよい出掛けました。慰問使、慶弔使といったものを始終派遣する。

逆に明国の使者を受け入れました。明国の使者の受け入れ専用の門が「迎恩門」です。迎恩門を中国の使者が入ってきますが、李朝のお出迎えの人々はこの門を通れないんです。迂回して行って、門の外側でお迎えする。お送りするときも、中国の使者は当然門を通過して出て行くわけですが、朝鮮の人々は門を通らず、これを迂回してお見送りするという形ですね。「三跪九叩頭之礼」というのがあります。これは跪き手ひざまずを地につけて頭を三回地に叩きつけます。その後、立ち上がる。この動作を三回繰り返すのです。三回跪いて九回叩頭をするという、考えようによっては大変屈辱的な儀礼をやったわけです。

この点を第三国人がどう描いたか。非常におもしろい本があります。シャルル・ダレという人の『朝鮮事情』という、平凡社で出ている東洋文庫に収録されています。フランス人宣教師というのはいすごいですね、当時の鎖国下の朝鮮に極秘に数人の宣教師が潜入して布教をしていたのです。パリ外邦伝教会所属の宣教師だと書いてあります。宣教師たちが頻繁にパリの本部に克明な書簡を送っているん

ですね。どういふルートで送ったのかわかりませんが、かなり精細頻繁なものだったようです。その書簡に基づいて、ダレが『朝鮮事情』という本を書いたという次第です。そのなかに、次のような文章が出てきます。

「朝鮮国王は、新しく交替するたびに、特使を遣わして皇帝にその即位の承認を求めねばならない。特使はまた、王家に關すること、朝鮮で発生した主要事件について、すべて報告しなければならぬ。反対に、ほとんどの中国人使節が宮廷での品階では朝鮮国王より上位にいるために、朝鮮国王は、使節を迎えるときはソウル城外に出てつっしんで敬礼しなければならぬし、そのうえ、使節が入城した門以外の別の門を通つてソウル城内に入らなければならぬ。また朝鮮の特使は、国境をこえて最初の中国側都市である辺門城門を通過する資格がないので、仕方なく迂回しなければならぬ。朝鮮国王は、皇帝の使用する色彩は使えず、皇帝の冠に類似したものをかぶることさえ禁じら



『朝鮮事情』

シャルル・ダレ著

(平凡社東洋文庫)

れている。あらゆる民間の文書は皇帝年号の日付で表さねばならず、また重大事件がおこったときは、事態によって国王は祝賀か弔慰特使（慶弔使）を遣わさなければならぬ」

事大主義というのは、こういう儀礼のなかに象徴されているのでしようね。

事大主義は、もちろん一つの対中外交のイデオロギーなわけですけども、同時にこの事大主義に基づいて李氏朝鮮の社会を徹底的に再編したというところに、朝鮮の特有な現象があるのだらうと思います。儒教（朱子学）による社会秩序の再編。そして、みずからを中華以上の中華たらしめようとする徹底的な再編成をやった。原理主義的な再編です。古田博司さんが『朝鮮民族を読み解く』という、ちくま学芸文庫に載っている本のなかで、「これは、中華への鬱屈したコンプレックスの表れでもある」という前置きで、次のような文章を書いています。



『朝鮮民族を読み解く』

古田博司著

(ちくま学芸文庫)

「コンプレックスを解消するため朝鮮民族が選んだ道は……中華の礼教を激しくも暴力的に教化し、実践する道であった。『朱子家礼』そのままに葬礼、喪礼、祭祀などを実践し、そして族譜をつくり、宗族を固め、再婚女を拷問し、不葬者を斬り殺し、喪に服さぬ者を百叩きにして、中国に胸を張って『東方礼儀之国』を自称したのである」

原理主義的で暴力的な社会再編を朝鮮がやったということとです。李朝以前には、こういう暴力的な再編はなかったようです。李朝になり事大主義を採用したことによって、こういう傾向がますます激しくなったということです。

ついでながら、「朱子家礼」とさつき言いましたけれども、これは朱子学に基づく冠婚葬祭のいわばマニュアルのようなものです。通礼、冠礼（成人式）、昏礼（結婚式）、喪礼、祭礼（祭祀）といったものを徹底的に儀式化する。それが儒教だと言っても、かなりの部分は言い当てているだろうと思います。

古田さんの文章の2行目に「礼教」と書いてありますが、これは儒教的な思考、礼式のことです。つまり、礼式を懸命に守ることによって、初めて人間社会はまっとうな存在になるという考え方なんです。だから、自然のままの人間というか、あるがままの人間、というのはまっとうな

人間じゃないと考えられていたのです。人間は礼教により教化されて初めてまともな人間、人間社会たりうる。あるがままの人間は存在しない。儒教社会における家礼のきわだった重要性をこう考えていいんじゃないか。つまり、儒教への極端な崇敬、中華への著しい傾斜が、長い李氏朝鮮の基本的なイデオロギー、ならびにそれに基づく社会秩序の再編であったということができません。

### 中国以上に宗族重視の朝鮮

渡辺氏 儒教社会の基本的な人間関係組織は、宗族そうぞくなんですね。これは中国もそうですが、朝鮮においては一段と強い宗族重視です。宗族というのは、父系性血縁集団もしくは男子単系血縁集団です。本家の中国よりもさらに厳格な宗族社会をつくったのが朝鮮です。血縁集団ですから、当然発祥の地があるわけですね。これが「本貫ほんかん」です。その本貫を同じうする血縁集団の凝集力を強めて宗族を強固な社会集団としたというのが、李氏朝鮮の特徴です。各宗族が相互に連合してより大きな社会集団を形成するということはほとんどなかったようです。個々の宗族がパッチワークそのまま、相互の連関がきわめて薄い状態をつづけたのです。その過程で、日本による韓国併合が始まったのです。

いま、パッチワークという言葉を使いましたけれども、

つまり宗族相互が協力することはない。むしろ争いが恒常的でした。その争いは、熾烈を極めたようです。それぞれ宗族は、宗族のいちばんトップに位する官僚（両班）を擁しています。両班をつくらうと、必死になって宗族内部の人間が協力しあう。女の子は身を売ってまでお金をつくって兄弟に科挙の試験に合格させるよう努めた、なんていう話をどこかで耳にされたことがあるんじゃないかと思いますが、そういう話に象徴されるような、宗族のトップに両班を擁するために競いあうわけです。トップになれば、当然その宗族全体におこぼれが回ってくるというメカニズムです。宗族間の抗争は、朝鮮王朝にあつては非常に血なまぐさいものとして展開されたようです。

どういふ闘争をするかという点、ここが文人国家の朝鮮らしいところで、日本のように武器をもって戦うという武人の社会ではありません。朝鮮は文治社会ですから、何を武器に戦うかという理論なんですね。朱子学の解釈をめぐる原理主義的ないわば理論闘争ですね。真相は宗族党派間の激烈な権力闘争です。これを朝鮮思想史では「党争」といいます。党派の利害を超えて異なる集団が国家統合のために力を尽くす、つまりナショナリズムは到底存在しえなかつたのです。そしてその状態のまま日本による韓国併合にまで至ってしまったというのが現実です。

## 反日義兵闘争などは3・1事件以外はなかつた

渡辺氏 韓国の歴史教科書はもとより、日本の朝鮮本では、反日義兵闘争がずいぶん頻繁に起こったかのように書かれております。このあいだ岩波新書の何という人だったか、東アジアのシリーズの韓国併合についての本をめぐっていたら日本統治時代に反日義兵闘争が起こったところがプロットされているんですね。朝鮮半島全体がこのプロットでほとんど黒くなっているんですね。よくまあ勘定したなと思う一方、イデオロギー的な史観もここまでくると大変なものだと思いました。実際には、荒木さんがおっしゃったように3・1事件を唯一の例外として、反日義兵闘争なんていうのはなかつた。むしろほとんどの朝鮮人が日本に協力して可能となつたのが日本統治です。「少なくとも李氏朝鮮の時代に比べれば、日本統治のほうがはるかにまじだつた」というのが、ごく平均的な朝鮮人の感覚ではなかつたかと思ひます。このことは、後でまた申しあげましょう。

いま言ったことの繰り返しですが、やはり国家よりも宗族のほうが上位概念、より大事な観念なわけです。国家という意識があつたかどうか。おそらくなかつたのではないかと思ひます。李朝時代にも、朝鮮民族とか朝鮮国家というものが、仮にあつたとしても、これは血族の外延的拡大

を想定したある種の、つまり疑似的な血族国家というイメージなのでしようね。

ベネディクト・アンダーソンの言葉に「想像の共同体」という一世を風靡した表現がありましたけれども、まあそんなものでしょうね。想像の血族共同体国家というイメージだったようです。アンダーソンの解釈は、「国民という社会的、政治的実体があるのではなく、イメージとして心に描かれた何か」が国家だ。国家というのは幻想の産物だという、超リベラル的な感覚の本であります。私はこの説にコミットできませんが、往事の朝鮮を、一世を風靡した表現を敢えて使えばそんなものだったのかもしれない。

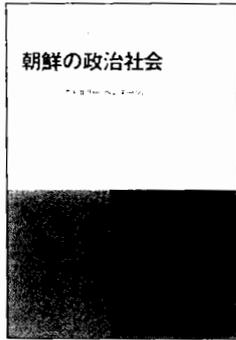
吉本隆明——吉本隆明なんていう名前をいま出すのも変ですけども、私にも青春時代がありました（笑）、その青春時代に吉本の『共同幻想論』がずいぶん読まれて、「あ、そうかな。新しい思想家が出てきたな」と、心踊らせたこともあるものですから、ふと思いついています。吉本はこの本の中で、近代国家が宗教性の強い古代・中世的な政治体制たる天皇制へと変じた日本の伝統的文化の奇妙さを論じていました。天皇制などというコミンテルン用語を使っているのはどうしたことかと思えますけれども、そういうことを論じた本です。朝鮮の李朝時代を見ているとなぜか私には「想像の共同体」とか、「共同幻想論」がイメージとして浮かび上がってくるんですよ。

元に戻って、朝鮮という国家、朝鮮という民族というものが存在したという実体的な感覚はなかったのではないか。血族の外延的拡大としての朝鮮というイメージしかないか。血族の外延的拡大とは思いますが。ナシヨナリズムは存在しなかったということ、そういう形でパラフレーズしてみたわけです。

宗族間の理論闘争つまり「党争」がどんなにひどいものであったかということ、再びシャルル・ダレが次のように言っています。

「貴族（両班、渡辺注）たちは、いくつかの派閥に分かれ、互いに執拗な憎悪をぶつけ合っている。しかし、彼ら党派は、なんら政治的、行政的原理を異にするものではなく、ただ尊厳とか、職務上の影響力のみを言い争っている大義名分だけのものである。朝鮮における過去三世紀の期間は、ただ血族間の血なまぐさい不毛の争いの単調な歴史にしかすぎなかった。……すべての貴族は、それら党派の一つに必ず属し、ただ高位高官を独占し反対派の接近を排除することだけに腐心する。このことから、永続的な不和と争いが生じるようになった。これらの争いは、多くの場合、敗北した党派の指導者の抹殺を期して終焉する」

さつき荒木さんから、「よくあんな国の大統領をやるよ



『朝鮮の政治社会』  
グレゴリー・ヘンダーソン著  
(サイマル出版会)

なあ」という話がありました。ほとんどが悲劇的な最後を遂げているわけですけども、李朝時代もそうでした。その伝統が現代も生きていると考えれば、不思議なことでもない。

もう一人、グレゴリー・ヘンダーソンの名前は、朝鮮研究をやった人ならみんな知っているはず。国務省のスタッフとして7年間ソウル、釜山に滞在して、韓国社会を精細に観察していた人ですね。後にアカデミズムの世界に入って、ハーバード大学の国際関係研究センターで朝鮮研究をずっとやってきた人でもあります。『朝鮮の政治社会』という本がサイマル出版会から出ていて、私の本箱には、発売当時からあった本がそのまま残っておりまして、引っぱり出してみました。李朝のことを、このヘンダーソンは次のように書いています。

「李朝の政府とは、人々を急速にそのなかにまき込んでしまう巨大な渦巻きであって、瞬時にして彼らを野心の絶

頂近くに押し上げるかと思えば、次の瞬間には彼らを一掃し、しばしば呵責なく処刑したり追放したりするのであった。それは、田園ののんびりした四季のリズムとなんら関係のないものであった。……王朝は平静を装いながらも、興奮と論争に明け暮れたのであった」

党派が権力をめぐって鬭争を繰り返す。そして頂点を得るんだけれども、その頂点を極めた党派も、次の党派によってひっくり返されて無残に抹殺される。そういうことの繰り返しであったといっているんです。宮廷内の抗争がいかにもドロドロとしたものであったかが想像される。ヘンダーソンは、それは朝鮮の農村の四季ののんびりしたリズムとまったく無関係のものであったということ、なかなかいい文章で書いています。

その当時の朝鮮を日本人がどう見てきたか、ここでは二つを引用しておきます。初めが福沢諭吉です。朝鮮半島というのはユーラシア大陸からニョッキリ日本のほうに突き出した一本の鈍だのような格好をしていますよね。だから朝鮮半島が敵対国になったり、あるいは敵対勢力の支配下に置かれるということは、明治の日本にとってはどうしても避けたいことであつたわけです。福沢は、なんとかこの李氏朝鮮を近代化させよう。日本の維新にならう文明開化をやってもらって、日本の協力の下にちゃんとした国家をつ

くり、ユーラシアの勢力が容易に日本に南下できないようにしようと考えたわけです。

そのために当時、開化派の金玉均等を中心とする若手官僚を慶應義塾に留学させ、いまの三田の山の上に福沢の私邸と別邸があつたようですが、そこに留学生を寄宿させながら義塾で、「日本はこうやって維新を実現したんだ」ということを一所懸命説いたのです。彼らが朝鮮に帰って行って、その影響力の下で近代化運動を始めるわけですね。さらには、福沢の門下生の日本人を朝鮮に送る。当時の朝鮮の文献はもちろん全て漢文でしたけれども、ハンガルの週刊紙『漢城旬報』という文明開化の必要性を説く出版物を出したりしました。これは史実がはっきり明らかでなくて諸説あるんですけども、福沢は開化派の決起のための武器を輸送したりもしたようですね。抜き身の日本刀を80丁から百丁ほど送ったらいいんですね。本当かどうかはわかりませんが、ともかく福沢は朝鮮に恋をしていたというぐらい、当初は朝鮮に非常に親和的な人間でした。

### 開化派のクーデター失敗で朝鮮を見切った福沢

渡辺氏 開化派を中心とするクーデターが起こった。これを甲申事変といいますが、これが失敗してしまう。クーデターはひとたびは成功したものの三日天下でした。大量の清軍が派遣されて開化派は一瞬のうちに叩きのめされて

しまいます。そこで福沢は打ちのめされるのです。開化派の教え子たちは命からがら、釜山、下関を経て福沢邸に帰ってくるという出来事がありました。

甲申事変失敗の事実を知らされたときの福沢の憤怒が、例の「脱亜論」という『時事新報』の社説です。

「文明の変遷、日に急にして、其東洋に向うの氣勢、復た前年の比に非ざること明に見るべし。この急変劇動の衝に当りて、内の腐敗は既に極度に達したる朝鮮国が、尚その独立を維持せんとするか、我輩の如きは到底その説を得ざる者なり」。

朝鮮が近代化するはずがない、文明開化するはずがないと、言い切っているんですね。

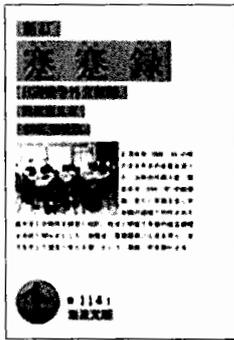
それから陸奥宗光。これは日清戦争を開戦、戦時、講和に至るまでの全局を指導した外務大臣です。この陸奥の朝鮮観が次の文章です。

「朝鮮半島は常に朋党争鬭、内訌暴動の淵叢にして事變のしばしば起るは、全くその独立国たるの責守を全うするの要素において欠くるあるに由ると確信せり。……今日彼の国におけるかくの如き惨状を袖手傍観しこれを匡救するの謀を施さざるは隣邦の友誼に反るのみならず、実に我が

国自衛の道においても相戻るあるの諄<sup>そし</sup>りを免れざるに依り、日本政府は朝鮮国に安寧静謐を求むるの計画を担任するにおいて毫も遅疑する所なかるべし」

朝鮮はどうしようもない。だけど、どうしようもない朝鮮を拱手傍観していたのでは、我が国の自衛におおいにリスクがあるので、朝鮮国の「安寧静謐」を図るための計画に遅れがあつてはならないと言っている。前者は明治の10年代、後者は20年代における日本のオピニオン・リーダー、あるいは外交担当者の朝鮮半島の政情に対する危機意識を明確に示したものです。

ところで、当時の朝鮮は典型的な二極社会でした。さつき両班といいましたが、両班とそれ以外の階層と二極に分かれた社会でした。両班と平民です。平民のなかに中人(下級のテクノクラート、算盤や簿記のできる官僚)がいて、常民がいて、その下に賤民がいる。両班と平民社会の二極に分かれ、その二極をつなぐ中間層が完全に欠落していた



『新訂 蹇蹇録』

——日清戦争外交秘録——

陸奥宗光著

(岩波文庫)

ということですが。儒教の伝統を引いて商人卑賤視観が強く、ビジネスはおよそ成立しない社会でした。経済と社会と政治の近代化を担う中間層の決定的な欠落、典型的な二極社会、二元社会だというわけです。

ヘンダーソンはこう言っています。

「西洋的な意味では、朝鮮(少なくとも朝鮮南部)には、中産階級というものは存在しなかった。共通の利害を持つた広範かつ人口稠密な機能的集団、あるいは、地位集団が、両班と平民の間に確立されたことはなかった。朝鮮社会は、基本的に、あらゆる権利を持つ支配層とあらゆる義務を背負わされた被支配層との二極社会であつた。独自の文化と商売という価値基準を持つ有力な中産階級という西欧、および日本における概念は、朝鮮には無関係であつた」

これがヘンダーソンの解釈です。日本やヨーロッパの旧世界のような封建制という経験を朝鮮はまるで持っていない。地方に分権的な政治権力なり産業なり学問がない社会ですね。中央に位置する両班とそれ以外との間に、まったく連携のない社会ということですが。ナシヨナリズムが起りようもないのは、ここにも関係しているのです。両班という支配層の内部に巢食う腐敗・汚職はさまざまいいものであつたようです。平民に対する搾取、収奪は、呵責のない

ものでした。

次の文章は、イザベラ・バードという人のものです。明治27年から30年、モンゴロイドの特性調査の一環として何度も朝鮮の全土にわたって旅行したイギリスの婦人がバードです。これは、講談社の学術文庫で『朝鮮紀行―英国婦人の見た李朝末期』という本として出ています。次の文章は、1989年から97年までの観察にもとづいたものです。

「朝鮮国内は全土が官僚主義に色濃く染まっている。官僚主義の悪弊がおびただしくはびこっているばかりでなく、政府の機構全体が悪習そのもの、底もなければ<sup>みぎわ</sup>汀もない腐敗の海、略奪の機関で、あらゆる勤勉の芽という芽をつぶしてしまふ。職位や賞罰は商品同様に売買され、政府が急速に衰退しても、被支配層を食いものにする権利だけは存続するのである」

さつき、族譜の話をちよつとしましたよね。宗族の本質に発し現世代に至るまでの系譜ですね。バードは同時に、これはほとんど信頼できないものだところを言っております。火事で焼失してしまつたし、何よりもこれは売買の対象であつて、現代に残る族譜などとても信頼のおけるものではないということに彼女は言っています。

## 事大主義と小中華主義というイデオロギー

渡辺氏 事大主義と並ぶもう一つの朝鮮のイデオロギーが、小中華主義です。自分は中華世界を構成する一部であり、むしろ、みずからを中華世界の正統の後継者だとする自意識が形成されたのです。現在の韓国の中国傾斜を考えると、この小中華主義という考え方は現存する観念なのだとも思います。

どうしてこんな考え方が生まれたかというところ、17世紀の初めに成立した清朝が満族（女真族）による、いわば征服王朝だったからです。もちろん、満族は長い伝統を持った漢族文明に抗することはできず、だんだんそれに同化・吸収されていくわけですけれども、政治権力の構造からすると、満清連合政権ともいべきものが清王朝だったのです。

満族というのは、古来中国の華夷秩序観念からすると、北狄・東夷・南蛮・西戎の東夷に相当する。その東夷に征服された王朝・清は、朝鮮が「事大」すべき対象とは考えにくいわけです。むしろ「中華の伝統を正統的に後継しているのは、清王朝ではなくて朝鮮王朝である」という観念ですね。朝鮮の小中華は本家の中華よりも研ぎ澄まされた観念ですから、周辺に対する侮蔑意識といえますか、差別意識は、中国よりもっと朝鮮において強烈なものであつたと想像されます。もちろん、「俺のほうが中華文明の正統

「後継者だ」ということを清国に向かつて言えば、これはもう潰されることはわかりきっていますから、表面的には清国に「事大」しているわけです。が、民族心理の深層においては——この場合の民族とは両班のことですが、両班心理の深層においては——中華の正統的な後継者は自分だという意識が根強く育っていったのです。

「衛正斥邪」という言葉があります。正を衛り邪を斥けるところですが、正というのは朝鮮の朱子学のことを言っているわけですね。邪というのは何かというと、清国の学問のことです。朝鮮の学問が正であって衛るべきもの、清国の学問は邪であって排斥すべきものだということですから。「大明国之東屏」とありますけれども、要するに「中華文明を東の端から俺たちが守ってやっている。俺たちがなければ清は……」という感覚なのです。そういう意味でのコンプレックスを裏返しにした優越意識が朝鮮にあったのです。

現実の国際関係においては清に服属し、清の儀礼を厳格



『朝鮮紀行』

——英国婦人の見た李朝末期』

イザベラ・バード著

(講談社学術文庫)

に守って、これに「事大」する。その一方、内面においては清朝を軽侮する生き方を選択したということですね。朝鮮では、これを「交隣」というらしいのですが、「事大」ではなくて「交隣」。形のうえでは事大しているけれども、じつはそれを軽侮しつつ交わるという「交隣」のほうを朝鮮は採用したわけですね。「事大」と「交隣」の交錯する、じつに鬱屈した心理だということができます。つまり、表層と内面が分離している。現実と思想とが亀裂しています。神経症国家なんじゃないでしょうかね。圧倒的なイデオロギー社会が朝鮮であったと私には思われます。「イデオロギーのみで生存し得た王朝としての朝鮮」という表現を私は使っていますが、いまの北朝鮮なんか見ていると、こういう伝統を引き継いでいるのかと思わされますよね。

はたまた「阿Q正伝的国家」か。魯迅に、辛亥革命時の貧しい農村の、ある間抜けな農民の生涯をアイロニカルに書いた『阿Q正伝』というのがありますよね。その青年は、「精神勝利法」というテクニクを持っていて、どんなにこづかれても、こぼかにされても、「結局、俺のほうが精神的には勝っているんだ」ということで、敗北心理をいつも克服していくという物語ですね。そういう考え方の国民であっては到底この時代を生きていくことはできないと魯迅は主張して、「中国近代文学の父」だと言われるようになったわけですが、朝鮮こそがなにか『阿Q正伝』的な感

じが私にはするということです。

時間がまいました。盧武鉉<sup>ノムヒョン</sup>政権以降、「過去史清算」という言葉が非常によく使われるようになりましたよ。ね。

「過去史清算」とか「歴史清算」という言葉がよく使われていますよ。僕も、もうぼちぼち75歳になります。否定したい、清算したい過去はいっぱいあるんですがね(笑)。なかなかそうは言っても過去史清算というわけにはいかない。やっぱり75年の蓄積があつて、僕という今の存在がよかれあしかれあるわけで、どうもこの過去史清算というのがよくわからない。しかし、韓国は本気でそういつているんですよ。ね。

「日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法」というのが、2004年3月に国会を通過しています。これはどういう法律かというと、こう書かれています。「日本帝國主義の殖民政策に協力し、我が民族を弾圧した反民族行為者が、当時蓄財した財産を国家の所有とすることにより、正義を具現する」というわけです。要するに、日本統治時代の対日協力者——こんな人、生きていくわけじゃないですよ。ね。お子さんも生きてない。お孫さんの、そのまたお孫さん。このあいだ韓国にアメリカから帰って来たのは李完用イワンヨウの曾孫でしたよ。ね。ともかく対日協力者の血縁につながる人々の土地を没収して国家に帰属させよう、という次第です。日本統治時代の対日協力者の罪過を暴いて、その子孫

が持っている資産を没収しようという、与野党の共同提案の国会決議がなされた。まあ、ちょっと信じ難いような法感覚です。

### 元慰安婦、徴用工判決の「過去史清算」論理

渡辺氏 直近の話では大法院により「元慰安婦の個人請求権放棄は違憲である」という判決が2011年8月に出ています。ソウル高等法院の判決として「新日鐵住金の元徴用工に対する賠償金支払い」が去年の7月、ご承知ですよ。同じ7月には釜山高等法院の判決で「三菱重工元徴用工に対する賠償金支払い」が出ました。こういう判決の背後にあるものは、過去史清算という思考回路なんですよ。ね。

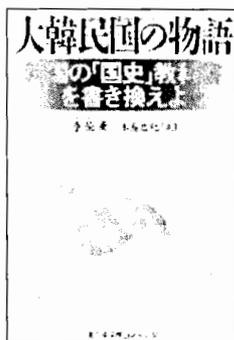
1965年の日韓基本条約によって、個人であれ、国家間であれ、いわゆる請求権は「完全かつ最終的に解決された」ことになっているわけですけど、こういう国際条約よりも、伝統的な思考回路のほうが優先されているのです。そういう意味で、韓国は法治国家とは言い難い。朴槿恵大統領も、「千年恨みは忘れない」というようなことを言っています。罪千載に及ぶというのはもう中世の世界ですよ。ね。さっきのシャルル・ダレはこんな例を書いています。

「朝鮮では、父親の仇を討たなかったならば、父子関係

が否認され、その子は私生児となり、姓を名乗る権利さえもなくなってしまう。子のこのような不孝は、祖先崇拜だけで成り立っているこの国の宗教の根本を侵すこととなる。たとえ父が合法的に殺されたとしても、父の仇あるいはその子を、父と同じ境遇に陥れなければならず、また父が流罪になればその敵を流罪にしてやらねばならない。父が暗殺された場合も、同じ行為が求められる。この場合、犯人はたいがい無罪とされる。なぜなら、この国の宗教的・国民的感情が彼に与<sup>くみ</sup>するからである」

よく宣教師の書簡に基づいてここまで書き込めたなあと思うんですけども、第三国人の判断であるがゆえに、おもしろいなと思います。

これもさつき荒木さんの話に出てきましたが、現実には日本の統治下において初めて朝鮮の文明開化の初期条件（人的・物的・制度的インフラ）が整備されたのです。このことはもう動かし難い事実で、多くの実証研究があります。



『大韓民国の物語』

韓国の「国史」教科書を書き換えよ

李榮薫著

(文藝春秋)

研究は日本にもありますし、カーター・エツカートのようなアメリカ人による実証もありますし、なによりも韓国人による実証が豊富に存在します。我々は動かし難い事実だと考えるのですけれども、現在の韓国の政治指導者はそうは考えない。やっぱり歴史は清算されなければならないと彼らは考えているわけです。

誰しも知っている象徴的なことは、これは金泳三の時代だったと思いますが、朝鮮総督府庁舎が解体されたことですよね。やっぱり過去を見たくない、清算したいという意味で、現実を直視する感覚は彼らには薄い。過去の醜悪な部分を消し去りたい。神経症でいちばんひどいのには、不潔神経症というのがあります。日なが一日石鹸で手を洗っていないと気がすまない。不潔に耐えられないというよりも、不潔に耐えられない、そういう症状がありますけれども、過去史清算などはどうもこういう神経症なのかもしれない。

最後に一つ、李榮薫イヨンファンさんの『大韓民国の物語—韓国の「国史」教科書を書き換えよ』という本が2009年に文藝春秋から出ています。これなんか、本当に見事に日本統治の実態を書いていますね。日本がやるうとしたのは「永久併合」だった。30年か40年、韓国に行つて、その後韓国から帰つてこようと日本人は考えていたわけではない。永久にここを日本化しようと本気で考えて韓国に行つたので

す。したがって、人的・物的なあるいは制度的なインフラを、日本は懸命の投資によって支えてきたんだということ、李先生は血を吐く思いで書いています。

それから、これも荒木さんがおっしゃったことですが、対日協力者と言いますが、当時いた日本人はどのくらいとおっしゃいました？

荒木氏 軍人ですね。一般官吏は60〜70万人ぐらい。

### ほとんどの人が対日協力者だった

渡辺氏 それにしても、韓国の人口から比べればほんの一握りであって、ほとんどの人々がいわば対日協力者であったわけです。また、彼らのそういう協力がなければ人的・物的な、制度的なインフラが整備されたとさえ思えないのですが、そのことについても李先生の本はよく書かれています。

対日協力者としていちばん大きな集団になったのは、「一進会」といわれる組織です。これは無用の反発を招くために、荒木さんご夫妻が翻訳者から名前を消している本ですが、金完燮の『親日派のための弁明』（扶桑社）です。韓国で、いまビニール本になっています。

荒木氏 いや、いまは売ってないですね。

渡辺氏 発禁本になっているんですか。これは非常に立派な本だと思います。史観も大きいですし、指摘もじつに

鮮やかです。これによると、「一進会は20世紀初頭、朝鮮革命のためにあらゆる革命勢力が連合して結成された朝鮮史上最大の政治組織であり、数十万人革命家の結社である」と書いています。先ほど来、「宗族を越え、異質的な社会集団を越える横断的な社会組織が朝鮮に生まれたことはほとんどなかった」と言いましたけれども、金さんは、「一進会」は朝鮮で初めて生まれた巨大な社会集団であったと言っています。伊藤博文は韓国併合までは考えてなかったのですけれども、結局この一進会の勢力に押されて、だんだん併合のほうに近づいていった。その上に安重根による伊藤暗殺があって、一挙に併合につき進んだというのが真実の歴史ですが、それはともかくとして、対日協力者としての一進会についての金完燮さんの指摘は、非常に正鵠を射ています。

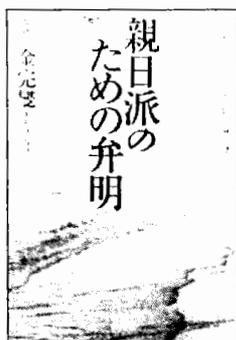
そんなことで、私の本棚にあった様々な本のなかで、「うん、これはちょっと皆さんにも読んでほしいな」と思うようなところをピックアップして来た、そういう資料のコレクションのような報告でした。

最後の「アイデンティティーの欠如」については、もう荒木さんがおっしゃいました。これも韓国人の不安定性、反日のひとつの大きな淵源なんでしょうね。つまり、あの国には建国の物語というものが無いわけですよ。インドでも、インドネシアでも、ベトナムでも、どこでも反植民

地闘争というものがあつた。そしてその上に建国の物語がつくられているわけですが、韓国では建国物語をつくりようにもつくれなかつたのです。したがって、朝鮮独立のための反日パルチザンを組成し指導したのが私だという金日成の嘘にひっかかって韓国内に親北勢力が増え、反日心理が増長しているという構図ですね。

最後の話は別にして、朝鮮という長い文化的伝統を持ってきた国が、中国、日本に対してどんな国際関係秩序観念を持ってきたのか。そういうことを伝統から説くと、こんな話になりはしないかなというストーリーを申し上げました。まだ報告や論文の形式にはとてもならない話でありましたけれども、しかし荒木さんのおっしゃった現代の韓国に対する解釈を、歴史的な観点から裏付ける報告にでもなっていれば、幸いです。ご清聴ありがとうございます（拍手）。

亀岡エリ子・檉山奨学財団理事長 どうもありがとうございます



『親日派のための弁明』  
金完燮著

（扶桑社文庫）

ございました。先生方お二人のお話を伺いましたので、ご質問をお願いします。

**渡辺氏** 私は、皆様としばしばお目にかかっております。せつかくの機会ですし、拉致問題にも関わってこられた荒木さんに対してコメントなり質問があればどうぞご自由に発言を下さい。Aさん、口火を切ってください。

**出席者A** 私も両先生の炯眼に年中接していて、荒木さんとはきょうトンカツ定食を食べました（笑）。一つあります。渡辺先生や荒木先生の話を聞いた方は、眉に唾する方もおられるかもしれませんが、「昔の話じゃないか」と。ここに韓国人がいたら、「これは、外国人の都合のいい文献だけを出したに違いない」と言うと思うんです。

**渡辺氏** まあ、そう言うでしょうね。

**出席者A** 僕もこの半島を40年ぐらい勉強してきました……35年か。外国の文献もほぼ読んでいるつもりですが、そういう文献しかないんです（笑）。別に渡辺先生が選択して、こういう文献を選んだわけではない。

それから、もしここに韓国人がいると「それは昔の話だ」と必ず言います。それで私が反論するのは、韓国というのは善しくも悪しくも伝統を引き継いでいて、普通の韓国人と話していても、ちよつと話すとすぐこういう精神構造に突き当たる。司馬遼太郎の表現を借りると、「日本人の意識の古層を3尺掘れば」という言い方があるけど、韓国人

の意識を5センチくらい掘ると、すぐこれにコッソと突き当たる。具体例を言いますと、私たち韓国研究者には小中華化思想というのが「また出てきたぞ」と、評判になっていまます。いま、日韓の首脳会談が開かれない。アメリカが躍起になって開かせようとしているのですが、韓国紙を読むと「日本が首脳会談を哀願してきている」という見出しが多くて、この間の齋木（昭隆）外務事務次官が韓国に行ったときは、「手ぶらで来て首脳会談を哀願する日本」という見出しでした。まさにこれは小中華思想に戻って来て、「私が日本という劣った国に会ってやる」と。

渡辺氏 手ぶらで来たというのは？

### 近代化した後、意識の古層が出てきた

出席者 A 韓国では、物を持たずに来て「会ってくれ」と頼む日本というのを、「手ぶらで来て、首脳会談を哀願する日本」と。哀願するというのはよく使います。いま、意識の古層がどんどん逆に出ている。近代化してなくなるかなと思ったら、むしろ経済的成長とともに意識の古層がどんどん表に出てくる。これが非常におもしろいですね。

あとは皆さんも聞きたいだろうと思うので代表して聞きますと、一般に韓国人というのはナシヨナリズムが強いと思われています。でも先生のご意見だと、「ナシヨナリズムはない」という変わった国家であると。これは、ナシヨ

ナリズムの定義によると思いますが、多分そのところは皆さんわからないのではないかと思うので、そこから質問したいと思います。以上です。

渡辺氏 朴正熙大統領の時代、韓国は南北の代理対立のフロントラインに置かれていて、国家意識をたぎらさなければ北に対抗できない、そういう時代でした。ここでは国家意識はかなり鮮明に出ていました。宗族意識よりも、あるいは党派的な意識よりも国家、つまりナシヨナリズムの意識が強かったと思うんです。ところが、冷戦が崩壊して世界全体の構図が左だか右だか訳がわからなくなってきた、さらに冷戦の崩壊が親北勢力の韓国内における蠕動を活発化させ、その結果、国家の観念よりも民族の観念のほうが強まってきた、そういうことだったんでしょね。

ただ、その民族という観念が北に対する劣等意識というのか、韓国には正統性の根拠がない、「北朝鮮には正統性があつて自分たちにはない」という気分裏付けられていますから、韓国のナシヨナリズムは我々が通常考えているようなナシヨナリズムとは違った、ずいぶん屈折したナシヨナリズムだと思うんですね。そういう意味でナシヨナリズムというのは、韓国には現代に至ってもなお形成されていないのではないかと思うんですが、どうでしょうか。

出席者 A 素人というか、朝鮮半島研究者以外は韓国人はナシヨナリズムが強いと思っていて、それは何故かとい

うと、人と会うとすぐいかに自分の国が立派かと言うとか、「俺たちは偉いんだ」と、すぐ言いたがる。「それはナシヨナリズムだ」という言葉ではめっちゃうと、先生のおっしゃったナシヨナリズムとは頭がこんがらかるんじゃないかなと思っうんですね。

**渡辺氏** エスノセントリズム、つまり自民族が他民族に優先している、あるいは価値において高い、そういう観念ははずれの社会にも多かれ少なかれあるものだろうと思うんです。広範な中産階層を中心として、国の凝集力をつくりだすようなナシヨナリズムというのが、通常我々が発展国のナシヨナリズムとして経験したものですよね。そういう意味でのナシヨナリズムが朝鮮にあったかと言われるとなかなか想像できないんですが。

### 自国を世界一と言いながら移民する国民

**荒木氏** 韓国人は、確かに自分の国は世界一だと言うんですけど、そのわりにはみんな移民しちゃいますものね（笑）。とくに金を持つとみんななくなっちゃいますから、あれがまさにナシヨナリズムと言えるのかどうか。あとは例えば名前にしたって、向こうの人たちは外国に行くくと、ベンジャミン・尹だとか、ダニエル・羅とか、簡単に変えちゃいますよね。だから、「創氏改名で文句を言うことはねえだろう」と、正直言いたいんだけど（笑）、そう

いうことを平気でやっている。だから、おそらく創氏改名のときだってそうだったんだろうと思いますね。

また、よく言われる整形大国で、あれだけ整形をやっても全然不思議に思わない。あれは、儒教とまったく反していると思っうんですが。

**渡辺氏** 基本原則と違うことをやっているわけですよ。

**荒木氏** だから、果たしてあの人たちにとってアイデンティティーって何だったんだろう。1つヒントになるのは、もう亡くなりましたが延世大学の李基鐸先生という政治外交史の先生が前に言っていた言葉で、「朝鮮戦争がなかったら、大韓民国はなくなっていた」と。つまり、朝鮮戦争があつて敵ができたので大韓民国というアイデンティティーが生まれたんだと。あれがなければ南のなかにはスパイなんか山ほどいたわけで、自然に崩れていって、アメリカも手も出せずに終わっていったのではないかということだったのですが、北朝鮮が攻めてきたお蔭で敵ができて、国として成ったと。朴正熙という人は、おそらくそれがよくわかつていたから、借物でも何でもいいからともかく国家としてのアイデンティティーをつくらうというので、おそらくかなり日本の当時のやつを使っただと思っうんですけども、徹底して国民国家としての教育をやって一応形ができました。ところがあの国というのは民族と国家というのがシーソーになっちゃって、国家が大事だということに

なれば北は敵になって、同盟国であるアメリカとか友好国である日本ともっと結ばなきゃいけない。民族が重くなる、今度は北朝鮮は仲間だけれどもアメリカ、日本は敵だというふうになってしまって、この両方が一緒にならないから。

渡辺氏 そうですね。

荒木氏 結局そこでアイデンティティー自体が混乱をして、まさに「北のほうが正当性があるんじゃないか」ということが入ってくると、ただなんとなく妄想として「自分たちが一番だ」というのは残りますけれども、実態は砂上の楼閣で、逆にどんどん自信がなくなってくる。自信がなくなっていくのを隠すために、「自分たちは最高だ」というのがもつともつと大きくなって、ハッと気がついたらもういられないといって逃げちゃうという。極端に言えば、そんなことなんじゃないかなと思います。

### 現在は反日ナショナリズムのピークの二つ

渡辺氏 反日ナショナリズムが底流としてずっとあり、強くなったり弱くなったりしてきたのですが、現代はその反日の大きなピークのひとつでしょうね。荒木さんの冒頭の話であったように、手のほどこしようがないと言われるぐらいの状況になっています。これはいったいどうしたのか。ハイテク部門で自分かなりの力をつけてきたとい

う、幻想かもしれないけれどもある種の自信がある。

これは、Aさんがネットの対談で言っていることですが、もうひとつ、韓国が大国化するにしたがって、つきあう国が非常に多様化してきましたよね。その結果、韓国にとつての日本の相対的ポジションが下がってきた。自国が強くなってきたのと同時に、日本の韓国にとつての相対的ポジションが下がってきた。だから、かつては顕現できなかった反日が、いまは安んじてはつきりした形をとり得る。この説は、僕はかなり説得力があるような気がするんですがね。それからもうひとつは、伝統的に事大してきた中国があれだけ膨張してきたので、ゆつたりした背もたれができなくなったような感じで、前にいる日本に「なんだ、おまえは」ということが言える。そういう条件が整って、今日お話ししてきたような朝鮮人の意識の古層が表出してきた。ここからどこに行くのかわかりませんがね。

この前の拓大のシンポジウムで、佐藤丙午さんからハンチントンの『文明の衝突』の話が出ました。ちょうどいまウクライナで厄介な問題が起こっていますが、ギリシャ正教圏とイスラム圏との断層線がああ辺りにあって、これが東西冷戦期には噴出しなかったけれども、ポスト冷戦期になつてこの文明の断層線が非常につきりと表出してきたという解釈ができるのではないか。Aさんが「古層の表出」とおっしゃったものは、これからあちこちで起こってくる

んでしょうね。

出席者 A はい。

渡辺氏 そういう意味で、ハンチントンの言っていることにはかなりの正当性がある。伝統的文化の表出ですから、話し合いで解決できるような形にはなかなかならないと思うんですね。伝統的な文化と文明が競合し、衝突する時代があちこちで始まるのかな。さつきもおっしゃったように、「発展して近代化もしてきたんだから、もうちよつと話し合いがうまくできるであろう」という幻想を日本人は持っていたんだけど、どうも現実にはむしろ逆ですね。強国の自覚、事大すべき対象の膨張があつて、本当に言いたい放題言えるようになってきた。そんなことは、世界のあちこちで起こっていませんか。そういうのを「文明の衝突」という観念でもう少し議論を深める必要性を感じています。朝鮮半島を見る場合でも、日韓関係を見る場合でも、あるいは日中関係を見る場合でも、ですね。

だから、その古層をお互いに客観的な言語で解剖しあつて理解するというのも、和解の道になりませんか。精神分析学というのは、そういう分野なんですよ。人間には意識している部分よりも、はるかに大きな無意識層というものがある。その無意識層は、性的な記憶が人間の中に押し込められてつくられたものです。だからそれはなかなか表出されにくい。表出できないが故に、その苦しみというも

のが人間の深い悩みにつながっているんだとフロイトは説いています。ベテランのドクターと症者との無限の対話の過程で、その無意識層を意識層にまで引き出すことによって、症者を神経症から救おうというのが療法の基本です。

この解説がおもしろいかどうかどうか分かりませんが、フロイトの精神分析学というのはそういう手法ですよ。ものすごく手間のかかる分析手法なんですけれどもね。こういう手法でやりますか。

出席者 A そのところで、多分それはうまくいかないと思うのは、お互いに意識の古層を比べあいこをしても……。

渡辺氏 だめか。

出席者 A 簡単な言い方をすれば、「おまえの古層がまづい」と(笑)。それはもう一人の先生、岡本隆司先生との「儒教とは何か」という対談で、「儒教とは、まず『俺が正しい』から始まるからだめでしょう」と。

二つ目のポイントで多分だめだと思うのは、精神病理学的に韓国人あるいは韓国という国全体に、「あなたのつらい過去の話をしましょう」と言うのと、ますます逆ギレしちゃうんじゃないかと思うんです。これは、あんまり韓国人の前では失礼だから言わないだけけれども、やっぱり辛い歴史なんだと思います。韓国人が、いま何人に生まれ変わりたいかという、アンケート調査によると韓国人というの

は1割とか2割ですよね。アメリカ人、日本人に生まれた  
いと。だから、意識の古層をひっぱり出すとさらにひどい  
ことになるから、みんな「あなたの意識の古層は、その  
ままでいい。捏造した歴史をみんな信じてやろう」とい  
うのが、今までの作戦だったわけですね。自信を持たせる  
ために。それしかないんじゃないかと思うんですけど。

### 韓国には『永遠のゼロ』『モ』『南極大陸』もできない

荒木氏 前にTBSで、『南極大陸』というキムタク（木  
村拓哉）が主演したドラマを見ていてふと思ったんですが、  
あれはかなり脚色してあるんでしょうけれども、ともかく  
日本の越冬隊が南極に行つて越冬したという事実があるわ  
けで、それをもとに脚色ができたわけです。韓国は、あれ  
ができない。だから、『永遠のゼロ』もできなければ、『男  
たちの大和』もできない。結局、そこをフィクションで覆  
い隠すしかない。韓国の戦争映画なんかみんなそうですけ  
れども、かなり左翼的な発想が入ってしまっていることも  
あって、いちばん大事なところは完全なつくり話になって  
しまつて、まったく史実と違うことになっている。材料は  
あったことを使うんですけれども、しかし話が全然変わっ  
ちゃう。そういうふうにしななければいけないかつたといふこ  
とは、鈴置さんが言われたように昔のことをほじくり出し  
ても何も出てこない。逆に嫌だったことばっかり出てき

ちゃう。統一がうまくいかない理由のひとつは、それがあ  
ると思うんですね。

つまり、ドイツの統一というのは、あのときいろんな条  
件がよかつたということもありますが、あるいはコールと  
かゲンシャールという人たちの努力があつたんですが、ドイ  
ツの国民のなかに「統一されたドイツの栄光を取り戻した  
い」というのがあつたから、多少の無理は国民が甘受する  
ということが、もちろん人によってそれぞれいろいろあつ  
たでしょうけれども、だいたいコンセンサスになつていた。  
ところが朝鮮半島というのは栄光の期間がないから、周り  
の国からいじめられていた時しか基本的にはないわけで、  
だから統一して栄光の国家を取り戻せるというイメージが  
ない。これが、やっぱりいつまでたつても統一に行かない  
ことの理由のひとつではあると思います。

出席者A まさにその例があつて、韓国の為政者とい  
うのは常に昔は日本を研究していて、大河ドラマがすごいと。  
NHKの大河ドラマで日本人の求心力ができてきていると思  
込んでいる人がいて、あるとき青瓦台の広報室に1989  
年に呼ばれて、「うちも大河ドラマをやろうと思つている。  
やっぱり韓国も求心力が必要だ」というんですね。2カ月  
ぐらいして呼ばれて「どうでした？」と聞いたら、「やつ  
ぱりうちにはああいう栄光の歴史がないから、かえつて自  
信をなくしちゃうからだめなんです。ついてはAさんにお

願いたいんだけど、反日をやって誤魔化そうと思うんだけどいいかい」と（笑）。「それは、朝日新聞か岩波書店あたりで言つてよ」と言つたら、どうも朝日に言いに行つたと思うんですね。

あのとき為政者だつてつらいんだなと思つたのは、「何があつても政権で誤魔化しがきかないと、俺たちはやられちゃう」という意識が強力にあつて、デモを見てみると、どんな激しいときもあの東亜日報のラインをほとんど越えないんです。あれを越えると、李承晩イソンマン政権時代に銃撃戦があつて死んだと。デモをやっているほうも、「あれを越えると危ないぞ」と、みんな思っているわけです。為政者のほうは、「あれを越えて来たら、撃ち殺すぞ」となっているらしいんです。それだけ緊張感があつて、そういう国家にあつては、嘘でもいいから歴史をつくらないとやっていけないという感じじゃないかと思ひます。そう言うと、身も蓋もない話になつちやいます。

### 韓国には戻るべき栄光の過去がない

渡辺氏 習近平のいまの「中華民族の偉大なる復興」というスローガンのキーコンセプトは「復興」ですよ。復興というのは、何か昔の回帰すべき偉大なるものがあつて、それをもう一回実現しようという意識ですよ。大清帝国への回帰願望が、「中華民族の偉大なる復興」という中国

の知識人の胸を踊らせるような表現になつてゐるんじゃないかと思うんですね。

ルネッサンスとは、要するに偉大な古典古代時代への復興（文芸復興）ですよ。ところが、韓国には、そういう回帰すべき過去がない。一方、否定すべき過去はいっぱいあるわけですね。それがさっきの過去史清算ですね。韓国は不幸な社会ですね。

出席者A ですから、それは捏造するしかなくて、具体的な例でいうとタゴールというインドの詩人が書いた、「朝鮮半島、輝く国よ」という詩があるわけですね。朝鮮経済史の勉強をすると輝いたときがないからおかしいと思つて専門家に聞いたたら、これは韓国人がつくつた詩だということです（笑）。ようやく最近、韓国の新聞も「あれは、じつは嘘だった。韓国人がタゴールさんとしてつくつちやつた詩だ」と（笑）。でも、それをやるしかなかつたんでしょうね。

もうひとつは、通貨危機で自信を失つた後に、さっきの大河ドラマで日本を攻めて勝つた歴史の話がドラマになりました。「そんなの、ありましたっけ」と失礼ながら聞いたら、「対馬を攻めたことがある」と。非常に短期の戦いだけど、それを延々1年間やるというんです（笑）。

渡辺氏 それは、元寇の話じゃなくて？

出席者A ええ。ハンゲルをつくつた世宗大王セジョンのときに

対馬の海賊を攻めたという文献が残っていたから、韓国の指導層は「これこれ」と思ったらしくてやったんだけど、あんまり迫力がなかったと。だから、これからもどんどん「栄光の歴史」の捏造が始まると思うんですね。

例えば、「李氏朝鮮時代はすばらしい経済発展をしていったんだ」と、だんだん韓国人が言いはじめましたからね。あのとき確か私が勉強したところでは、貨幣はなかったわけですね。イザベラ・バードも中国製の銅銭を馬に積んで運んで行ったわけで、つまり紙幣がなかったのです。紙幣がなくて経済発展をするというのは世界で初めての経済発展だと思って（笑）。そういう捏造が始まっていますよね。

### 前方後円墳をめぐる捏造も

**渡辺氏** 慶尚道の北道だったか南道だったか、前方後円墳が幾つか発見されたらしいですね。韓国の考古学会では、「それみろ、これも韓国から日本に渡って行ったんだ」というわけです。大平財団の大平裕さん——大平正芳のご子息ですけどね——が、韓国の主張は嘘だということを明快に立証しています。「どうして韓国の考古学会はそんな嘘を平然とやるのか」というわけです。

**出席者 A** そうですね。北朝鮮とまったく同じで、北朝鮮のなかで金日成キムイルソンのやった抗日闘争の非常に大きな成果と言われているひとつが、普天堡戦闘ポチヨンポという、普天堡電子楽

団というアンサンブルでよく聞く名前ですが、これは何をやったかというと、満洲国との国境地帯の駐在所を襲撃して、お巡りさんを2人ぐらい殺したのかな。そのぐらいのものですよね。それが、金日成の赫々たる戦果という話になっているわけで、ということは、じゃ一体他はどうだったんだという話になれば、何にもやってないわけです。それを、ともかく無理やりにもつくらなければいけない。

**渡辺氏** 国境は越えたんですか。

**出席者 A** 国境の駐在所か何かを襲って物を取って行ったという話。だから、山賊とかそういうレベルの話ではありませんけど。

**荒木氏** それも、本当の金日成かどうかはわからない。

**主席者 A** まさに荒木先生がきょうおっしゃったのは、韓国人の捏造。「わかったよ」と言っていたのが、だんだん日本人も怒りだしちゃったと。

**渡辺氏** まあね、僕の青春時代は60年安保の時代ですから。僕は韓国の若者のいまのセンチメントはよくわからないではありません。僕らの青春時代、北朝鮮のプロパガンダが日本に蔓延してましたよね。思い出すのは、そごうの上に読売会館という、いまもありますか、あそこで胸踊らせるプロパガンダ『チョンリマ（千里馬）』という北朝鮮の発展ぶりがいかにすごいのか。劇場全員シーンと静かに、「ああ、北朝鮮ってすごい国なんだ」と感じ入っております。

した。北朝鮮のプロパガンダに韓国の青年がひっかかっていたのです。恥ずかしながら。自分の青春時代を考えると、日本人も完全にまいていたわけですよ。

新潟から北朝鮮に出る帰還船があったじゃないですか。あの見送りの壮行会に行こうかといつてチケットを買って、本当に行ってみようと思ったんですけど、新潟まで行くお金がなくて、結局やめたことがあるんですけども(笑)、そんな気分を抱かされた時代が日本にもありました。なんとも恥ずかしい話をしているようですが、当時の主張ってそんなものだったですよ。ですから、主張というものの恐ろしさ。いま韓国の若者がそういう心理に傾くのは、自分の体験に照して無理もないなとも感じます。

日本人も、あの時代になってアイデンティティーの模索をいろいろやらざるを得なくなりましたね。その一つが中華人民共和国であったり朝鮮民主主義人民共和国であったり、もちろんソ連邦もあったわけで、非常に複雑だったんですよ。そんな次第で韓国を論難してもしょうがないなという気持ちも一方にはあります。どうですか、Bさん、何かコメントしてください。

### 大統領の「告げ口」外交の影響は…

出席者B ここでお話しが出ていふことでわかるように、日本人は韓国人のことを善くも悪くも知っていると思

うんですよ。ですから、いま韓国で起こりつつあること、韓国人がやりつつあることも、日本人から見ると無理しているとか、捏造しているといふことはすぐわかるわけです。だから、日韓関係を見ている場合にはもうそれでいいというか、私はしばらく放っておけばいいという感じはするんですけども、国際社会の文脈で考えてみると日韓関係だけでは済まないものがあつて、韓国が行っていること、そして再三お話に出ているようにこの間の20年間を通してみれば、日本の国力は下がり、韓国は上がり、あるいは中国はもつと強化して、とにかく韓国って結構いろんなところで頑張っているんですよ。一人ひとり発言力もあるし、自信過剰でもあるし。

というなかで、いちばん端的なのは告げ口外交といわれている大統領の…大統領自らがやるようになってしまっている。そうすると、韓国についての実態とか過去史を日本人ほど知らない国々の人々にとっては、「それもそうかな。韓国の言うのはもつともかな」と感じる向きもないではないと思うんですよ。そうなった場合に日本の立ち位置は、非常にフリーというか、はかばかしくないというか、「ちよつと日本も問題があるんじゃないか」といふふうに流れていくトレンドがきていると思うんですよ。

渡辺氏 アイデンティティーはそう流れて。

出席者B 日本としては、そこをどうするかというのが、

すごく……。

渡辺氏 外交としてはね。

出席者 B いちばんの課題で、「韓国はああいう国なんだね」ということはもうわかっているから放っておいて、少なくとも対韓外交を国際社会のなかでどうやるかということが、日本にとつていちばんの課題なのかなと思います。

渡辺氏 日韓関係を、日韓関係という一次方程式では解けなくても、連立方程式を考えろということだと思っただけですが。

荒木氏 マクロに見れば、朝鮮半島というのはともかく近代に入ってから、日清・日露の戦いから、朝鮮戦争もそうですが、自分のところが戦場になつても一度も主役になつたことがない。日清・日露の戦いは両方とも朝鮮半島をめぐる戦いですが、当時の朝鮮あるいは大韓帝国はほとんど関われなかった。朝鮮戦争は、北朝鮮が始めた戦争ですけども、それにアメリカが参戦してきて、南側はもうアメリカが戦争をやる。それで逃げて行ったら今度は中国が入って来て、中国が戦争をやつて、いわば中国とアメリカの戦争みたいになつてしまったということ、常に主役の座にいられない部分がある。ある意味でいうと玄關みたいな、みんな通つて行くだけというところがありまして、だからマクロに見ていけば、あんまり気にすることはないんじゃないかという感じがします。

それから、まさに告げ口外交とかミクロにやられているわけですけども、それが決して一貫性というか、韓国にとつての国益を考えてやっているとは思えないし、かなりいろんな抜けたところがあるんですね。そこを日本はちゃんと冷静に分析して、突いて行くことはもつとできるのではないか。何にもしないで言うことを聞いているのではなくて、要所要所に楔を打ち込むことで、逆に韓国側が大声を出していることをプラスに使えるのではないか。

竹島がまさにそうですね、竹島は韓国では宗教みたいなになってしまつていて、絶対に手をつけさせないと。だけど考えてみれば、世界中の領土問題で占拠しているほうが大騒ぎして、されているほうが静かなところはあそこしかない（笑）。だから、韓国は騒げば騒ぐほど、「ここで領土問題があるんだ」と世界中に知らせているようなものですよね。だから、逆にいうと適当に怒らせて大騒ぎさせて、「ちよつとおかしいじゃないか」というふうにやるとかいう手は、私はいろんな局面であると思うんです。ちよつと具体的に他にどういふことが出たのが出てこないの、あまり具体的なお答えではないんですが、それを冷静に見てやつていくということが、日本としては必要なんじゃないだろうかと私は思います。

## 安倍外交は結構うまくやっている

**渡辺氏** さつき事大主義の話をしました、韓国の事大というのは結構、日和見主義的でね。きょうは朝鮮の中国への事大の話をしましたが、近代史を見てみるとこの事大の対象はよく変化しています。ロシアへの事大、それから日本への事大。事大というイデオロギーはあるけれども、その中身、実態はころころ変わる。

あれだけハイテク国家になり、日本が平成不況でこの二十何年、国力は低下し、国際的プレゼンスも低下してきますと、やっぱり言いたいことを言いうる条件がそろったということなんでしょね。結局、日本は強くなるしかないというのがさつきの荒木さんのお話の結論だったのですけれども、中国との関係においても、ロシアとの関係においても、どこの国の関係においても、まあ日本が強くなるしかしようがないんでしょね。現在の国力ではどうしようもないということなんでしょねえ。

僕は安倍外交って結構うまくやっているんじゃないかなと思うんですね。つまり、意図的に韓国を無視しているのですよね。そうすると、向こうもちょっと焦り始めているようなところがありませんか。つまり、僕は「盆暮のつきあい」と言っているんですが、東方礼儀の国ですから礼は尽くすことにしませんか。お盆になれば御中元も出すし、

暮れになれば御歳暮も出して、できれば年賀葉書や暑中見舞いも送って、そういう礼式上のつきあいはちゃんとやって、あとは淡くつきあう。「君子の交わりは水のごとし」ですよ。そうすれば、向こうのほうから動いてくるという考え方はどうですかね。

**荒木氏** 基本的に寂しがり屋の人たちですから（笑）、相手にされないというのがいちばん嫌だと思えます。

**渡辺氏** なんか男女関係みただね、追うと逃げる（笑）。  
**荒木氏** 他の台湾とか、そういうところもつと仲良くして見せつけていくと、だんだん「これはまずい」という思いになるんじゃないですか。

**出席者 A** ただ最近、ちょっと韓国も日本との関係を変えようというのが去年の秋ぐらいから出てきたけど、それは日本ではなくて、アメリカが怒っているからというのが大きいと思います。バイデンが韓国に行って、「おまえは中国を取るのか、アメリカを取るのか、どっちか」と、朴槿恵に言ったわけです。韓国は、あれからちょっとビビりましたね。だから、いま日韓首脳会談を嫌々でもやろうかなという雰囲気になったけど。

**渡辺氏** 日韓首脳会談に持っていこうというのは、本気ですかね。

**出席者 A** 朴槿恵以外はかなりビビっていてやらなきや

いけないと思っっているけど、朴槿恵はいまは神様ですからね。みんな困っているんですよ、韓国でも。

**渡辺氏** 僕は、実現しないほうがいいような気がするけどなあ。

**出席者 A** 実現しないというのがアメリカの問題になっていて、いちばんアメリカの面子が潰れていて、はっきりシリアでもロシアに回復したり、クリミアでもチョンボこいて世界中でバカにされているわけですよ。ばかにされるから中国の前で、「日韓、仲良くせい」とやって日韓ともそっぽを向かれちゃったら、アメリカはアタマに来ますよね。

これは別に誰かに聞いたわけではないが、多分アメリカは日本と韓国に対して、「日韓関係をよくしないと、オバマの訪韓・訪日をやめるぞ」というカードを切っていると。

**渡辺氏** なるほど、可能性はありますね。

**出席者 A** それがいちばん日本に来ますからね。日本のほうも韓国のほうも会いたくないわけだから、本音では。アメリカは、よけいなことをし始めちゃったわけですよ。で、どうするのかという話ですね。

### 中国の反日の方が対処しやすいのでは

**渡辺氏** 中韓の反日を見ていて、僕は中国の反日というのは、この前ご報告したような伝統的な国際秩序観念から

出ている、その意味でやっかいだという側面がありますよ。しかし、同時に、共産党の対日外交があればほど強硬で挑発的なのは、多分に戦略だと思っうんですよ。向こうがストラテジックであるならば、こちらはストラテジックに対応すべきだという、方程式は簡単だと思っうんです。要するに抑止力を持つことですよ。

他方、韓国については、米韓関係があり、日米同盟があった、日韓同盟はないけれどもある種のトライアンギュラーの関係のなかで、韓国が日本に攻めて来るということはないわけですね。抑止力という観念は、日韓関係においては成り立たない。だから手のうちようがない。日中関係においては、相手がストラテジックで出てくるならステラテジックで対抗するという論理は明白ですよ。だけど、韓国はストラテジックで何かをやっているのではなくて、エモーションでやっているわけですよ、多分に伝統に基づいた、ですよ。エモーションにどう対抗するかというのは心理学の領域でしかないのです、政治学ではないですよ。

**出席者 A** エモーションに対してはエモーションだけでなく、それはみっともないですからやらなかったんですよ。(笑)。

**渡辺氏** みっともないし、負けますよ。

**出席者 A** 従軍慰安婦というんだったら、日本にいる韓国人売春婦をつかまえて送り返せばいいんです。とくに朴

権恵が日本に来たとき、一緒の飛行機に乗せればいい(笑)、これがいちばん簡単です。韓国人売春婦は世界中で問題になっていきますから、こういう手口はあるんです。やり方はあるんだけど、やると日本人って「それはちよつと下品だから」となっちゃいますから(笑)。

**出席者B** 日本人がそれをできるかどうかですよ。

**出席者C** 片山さつきさんがこの前、インターネットでしきりとそれを言っていました。「新宿に1万人もの韓国人売春婦がいるから、送り返せばいい」と言うから、私は「違うんじゃないか」と言ったんです。韓国と同じ土俵で喧嘩していたら嘲笑されるだけで、日本のデイグニティーも何にもなくなるので、慰安婦問題の解決策は、大きな委員会をつくって、その中に歴史問題委員会を未来志向委員会などと同列に作って、専門家の方には悪いけれども、専門家同士でガンガン何十年間も喧嘩してもらわないのではないかと思っています。

**渡辺氏** 日韓で？

**出席者C** 日韓合同で、日韓の学者たちがそこで侃々諤々やりあう。いま資料が世界的に出てきていますから、アメリカの資料なども入れてやっていくのが、いまの日本に相応しい対処方針だと思っんです。基本的には、先ほどおっしゃったように国際的にどうするかという話です。日本の悪口ばかり言われ、イメージを悪くされている。同じ

土俵で戦うのではなく、もっと上の土俵に、メタのレベルに行かないといけない。

岸田文雄外務大臣は国連人権委員会などで現在の国際紛争での女性被害をストップさせたための措置に日本は相当お金をを出していると言います。でも、普通の人はそういう事実を知りません。世界も知らない。だったら、もっとPRして、「日本はこれだけやっている。日本は、世界の女性の人権を守る最前線で頑張っている国だ」という事実を時間が掛かってもいいから周知徹底して、「70年前の話と、まの話と、どっちが大切ですか」と裏でやりながら、日本の貢献をPRしていったら、世界の見る目は違ってくると思っんですけどね。日本は、PR下手だと思っんですよ。

**出席者A** Cさん、韓国紙は「二枚舌の日本」と書きますよ。彼らは屁理屈ですから。

**渡辺氏** アメリカの『ニューヨーク・タイムズ』とか、『ロンドン・タイムズ』とか、インドとかベトナムでどう報道されるかということが大事なのです。コリアンは悪口を書くのは決まっているので、相手にしなければいいだけです。

### 北朝鮮の人権問題に関心がない韓国人

**荒木氏** ひとつの方法とかどうかわかりませんが、北朝鮮の人権問題はともかく世界でも最悪の人権状況にあるわけで、ところが韓国人はまったく関心がないんですよ。

ね、本当に。これだけ慰安婦の問題とか人権がどうと言うわりには、いま北で苦しんでいる人のことは何にも考えてないですから。逆に、日本がそれを先頭に立ってやると。もちろん拉致問題とかありますが、「日本はそういうことで苦痛を受けているから、北朝鮮にいる人たちをみんな幸せにするためにやるんです」と言うというのは、韓国にとつてはものすごいコンプレックスにはなり、そういう意味では、結構彼らのなかに混乱をきたさせることにはなるのではないか。

それがうまくいけば今度は北の人からすると、いま韓国には北から逃げて来た2万5千人ぐらい脱北者がいますけれども、韓国のなかではなかなか難しいんですよね。韓国人は、すごい差別をするから。そうすると、「南の連中はこんな自分たちに冷たかったけど、日本は一所懸命やってくれた」という話になって、だから分断していく。こっちから分断という形になると、またそれこそ朝鮮日報に書かれちゃいますけれども（笑）、でも向こうの人たちのやり方というのは、汗を吹いて髪振り乱してやりながら、ふと気がつくときズボンのチャックが開いてるところがすごくあるので、だから突き所はじつはものすごくたくさんあるんじゃないかなという気がします。

渡辺氏 古田（博司）さんの本によると、彼は日韓歴史共同委員会の教科書班長ですが、指定された図書を韓国側

の委員の人は読んで来ないんですって。こっちは全員、30〜40冊、一所懸命読んでいくのに、韓国側は都合の悪い本は読んで来ないんですって。山川出版や東京書籍ぐらいは読んでくるのでしょうかね。他は読まないらしい。だから話にならないというんですよ。僕はその場にいなかったのかわからないけれども、おそらく本当なんじゃないですかね。

日韓問題を反映して（笑）、我々の議論も延々尽きなくなってきました。このあたりで。

亀岡氏 きょうは、お忙しいところをまことにありがとうございます。ありがとうございました。

（東京都中央区京橋の榎山奨学財団会議室で2014年3月18日に行なわれた第5回渡辺利夫先生を囲む懇話会の基調報告と質疑応答を同財団のテープ起こしに基づき編集しました。クローズの会合なので出席者の発言は出席者Aなどの形で表記しました。写真は榎山奨学財団提供。文責は編集部）